

980.28
N91



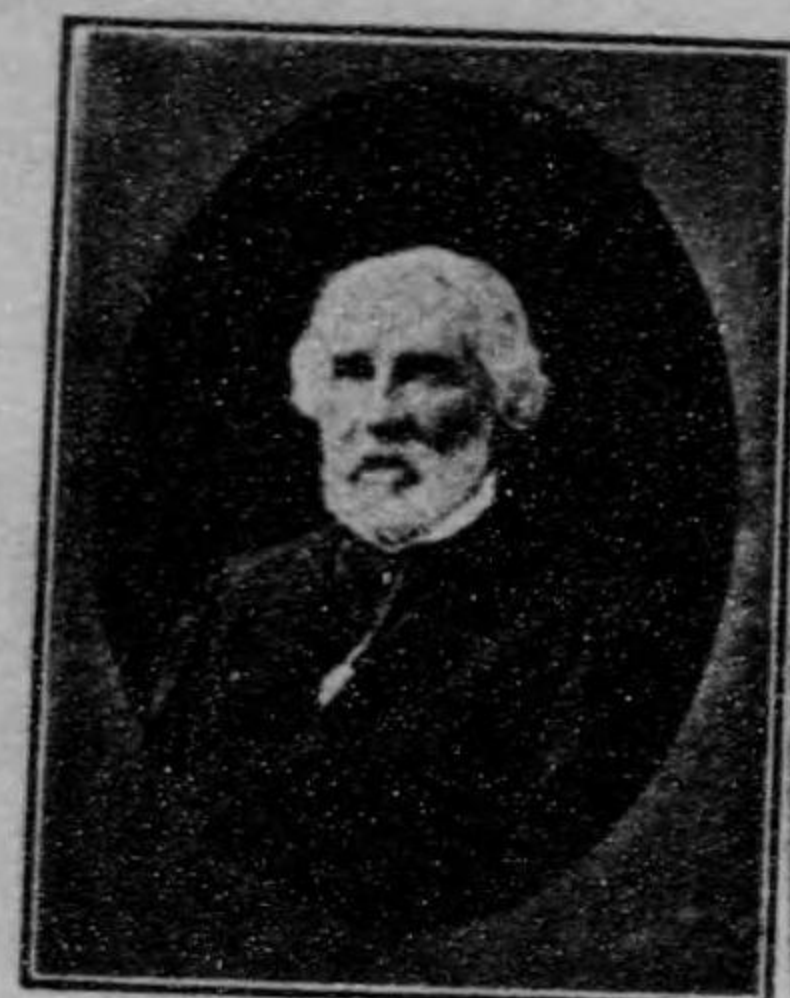
始



コ-1982

~~3. 11. 11~~
980.28

コ



bb. Myzorech

ツルゲーニエフ
昇
曙
夢

大正
3. 11. 11
内交

1611

小序

スラツとした大きな體格、面長で、額が高く、額の上には二筋ばかりの皺が書かれて、二重瞼の優しさうな眼は、半ば沈み、半ばうつとりとして、偉大な思想家に見る如き内心の深い思ひを語つて居る。雪なすばかりの白髯は鼻下と言はず、額と言はず、生えるがまゝにむしやくと生えて、一向飾らうともしない自然の氣品は何となく人を壓し、人を懐かしめる。右鬢の上でぞんざいに分けられた白髪は豊かに波打ちながら、耳の下まで垂れかゝつて

一體に優しく、穏やかなうちにも、何所となく沈んだ寂しい所のあるのがツルゲーニエフの肖像である。誰でもツルゲーニエフの肖像に對した時に受ける此の第一印象は、彼の著作を読んで居るうちにも始終我々の心を取纏ふて離れない。これは恐らく彼が少年乃至青年時代に経験した家庭の冷たい空氣と深刻な印象とが、自然彼の性格と筆致の上に現はれて、それが遂に一種のさびしみを帯びた、優しい、懐かしい、晩春の朧ろ月夜の自然の如く、我々を魅する偉大な力となつたのであらう。「艶麗の中の寂しみ」——これがツルゲーニエフの藝術であり、彼の生涯である。

著 者 識

目 次

| | | |
|--------------|-----|----|
| 一 時代 | ……… | 一 |
| 二 祖先と父母 | ……… | 一五 |
| 三 幼年時代 | ……… | 二五 |
| 四 大學時代 | ……… | 三七 |
| 五 獨逸留學時代 | ……… | 四九 |
| 六 仕 官 | ……… | 五三 |
| 七 初期の作物 | ……… | 五七 |
| 八 ベリンスキイとの交友 | ……… | 六二 |
| 九 『獵夫記』時代 | ……… | 六五 |
| 一〇 第二期の作物 | ……… | 一九 |



時代

西暦千八百四十年代は、露國文壇に於ける天才輩出の時代であつた。ゴリ、ドストエーフスキイ、ペリンスキイ、ゴンチャロフ、ネクラソフ、オストロフスキイ等の作家や批評家が時を同じうして現はれ、最近に至るまでヤスナヤ・ポリヤナの一角より世界に向つて呼號奮闘して終に悲惨な最

| | | | |
|----|----------|-----|----|
| 一 | 禁錮 | ……… | 二〇 |
| 二 | 全盛時代 | ……… | 一四 |
| 三 | 第三期の作物 | ……… | 一五 |
| 四 | 農奴解放 | ……… | 一八 |
| 五 | 『父と子』事件 | ……… | 一九 |
| 六 | 巴里の生活 | ……… | 二八 |
| 七 | 第四期の作物 | ……… | 二四 |
| 八 | 晩年 | ……… | 二七 |
| 九 | 人物—態度—作風 | ……… | 二九 |
| 一〇 | 結論 | ……… | 三七 |

目次終

後の場面を異常なる姿に於て我等の前に展いて見せた^{レオ}リヨフ・トルストイの生れたのもまた此時であつた。余が此書の中で、その偉大なる文學的事業とその光彩と數奇に富める生涯とを記さんとするイワン・セルゲーウイチ・ツルゲーニエフもまた此時代の人である。

斯様に露國文學史に於て主要な地位を占めるべき多數の天才が輩出して、その該博なる才能と高遠なる哲學的見識を以て、その作品論説を公にしたのであるから、正に世界文壇に於ける偉觀であつた。露西亞文學史家はこれらの作家を總稱して「四十年代の作家」と名付けてゐる。

「四十年代の作家」は、文壇に於ては第一流の小説家、詩人、評論家であると共に、社會上に於ては時代の指導者であり、また新國家的運動の先驅者であつた。同時に社會各黨派の標榜は純文學的のものであつた。ブーシキンの

詩の意義に關する問題は、社會政治上の主要な題目となり、社會政治上の人生觀の基礎となつた。文壇は文藝の定義に關する問題の爲めに二派に分れ、社會運動の先驅者を以て自任してゐる人々は、藝術は人生に奉仕すべきものと主張し、此進歩的運動の反對者は純藝術の獨立を痛論した。

このやうに文學と社會問題とが密接に交渉したが爲めに、作物の純文學的價値は其作物の批評に影響を及ぼすことが少なくなつて、主として其作が進歩的運動を促すものであるか否かといふことが批評の標準となつた。故にこの時代の露西亞文學を研究せんとするには、當時の露國の社會に就て充分な智識を有つてゐなければ、決してよき準備をした研究者とは言はれない、文學は社會と有機的に交渉してゐるのであるから。

ツルゲーニエフの作物も其例に洩れない。例へば千八百五十九年に出た

『その前夜』の基調を解するには、露國社會が當時喜び勇んで期待せる心持を了解しなければならぬ。此樂しき心持といふのは、新治世（アレキサンドル二世）の改革熱（農奴解放を指す）に影響せられたものである。けれどもその後二年を隔て、出版された『父と子』を評價せんとするのには、我等は更に別の準備が必要である。即ち僅々二年の間に社會の新思潮は明瞭となつたから、この明瞭となつた思潮の變遷を知らなければならぬ。またその後五年を経て現はれた『煙』を味ふにはその五年間に於ける急激な社會政治上の變動を忘れてはならぬ。それから千八百七十六年に出た『處女地』を解するには、七十年代の初期の社會現象に關する智識が必要である。そこでブランデスも憚う言つてゐる。

『ツルゲーニエフを充分に評價せんが爲には、是非とも露西亞語を解し、而して露國の社會、歴史及び文學史に深い造詣がなければならぬ。』

『農奴權泰然として磐石の如く、また城廓の如く屹立せり』とは、この時代の新思潮の波に浮ぶ人々の歎息であつた。千八百四十年代の露國社會は農奴問題に熱中して他を顧るの暇なき時代であつた。一方農奴を所有する地主、貴族は政府と共に崩れかゝつた農奴權を維持しようとして、農奴解放運動に極力反對し、他方人道主義ヒューマニズムと自由民權デモクラチズムを唱道する人々は、農奴權の不法にして野蠻なる事を公言し、農奴解放の一日も忽せにすべからざることを叫んだ。舊社會の上下がこのやうに喧々囂々として論議した農奴とは抑もどんな物であるか、吾人は此書の最初に於て、農奴權の起源沿革とその經過とを叙述する必要を感じるものである。

太古の露西亞は國土が非常に尨大であつた割に、人口が極めて稀薄であつ

たから、誰でも其欲する土地を選んで移住して、其地を開拓し耕作することが自由であつた。けれども荒寥たる未開地を、個人で開拓耕作するのは、全く不可能の事であり、且つまた茫漠無人の境にたゞ獨り住居するのは、非常に危険な事であつたから、往時は互に團體を組織して移住し、開墾に従事したのである。而して團體の開墾した土地は、其團體の所有となつて、其地方の領主たる大名(クニヤージ)に對して土地使用の爲め若干の租税を納め、團體は開墾した土地を一人々に分配したのである。また土地の領主たる大名の外に、露西亞には古來武士といふ一族があつて、同じく土地を絶対に所有してゐたが、此等の土地所有者は農民の團體を招聘して、自分の領地内を開墾して貰つたのである。而して農民の團體は假令甲なる領地に移住しても、若し其土地を好まない場合には去つて乙地に赴くことが能きて、十六世紀ま

では土地の去就は全然彼等の自由であつた。然し十六世紀に至つて、移住轉居を禁止せられ、禁令發布の當時移住してゐた土地を去ることが能きなくなつて了つた。此禁令によつて、農民は轉居を禁せらるゝと同時に、時代の經過するに従つて、漸次土地同様に領主の所有に歸して了つたのである。

かくして領主の權下に屬した農民は衣食住を支給せられるのであるが、身體の自由は奪はれ、全く人權なるものを知らない有様となつた。領主は彼等に對して恣に絶對の主權を行ひ、暴威を逞ふし、農奴は唯々諾々としてその命に服従しなければならぬ。若し農奴にして領主の命に服従しない者は、或は西比利亞に追放せられたり、或は親子兄弟の間を割かれたり、夫婦の仲を裂かれたり、或は酷刑嚴罰を受けることになるので、恰度米人が黒奴に對して行つた私刑のやうなものであつた。十九世紀の初めに至つては、農奴權

の濫用は殆ど其絶頂に達し、領地主等は農奴を目して、身體は人間であるが、其精神は犬猫の如きものと見るやうになつて、恰度商品のやうに所々方々に賣買するやうになつた。それが爲には多人數を纏めて賣買する卸問屋があれば、また二三人を抜き賣する小賣店もあり、又は一人幾何といふ様に貸借することもあつた。それで僧侶も商人も官吏も皆貴族の名義を借りたり、または地主貴族より一定の期限を定めて農奴を借り受け、それを使用することもあつた。

然るに十九世紀の半ば頃からは、歐羅巴の文明、殊に當時佛蘭西に勃興した人道主義ヒューマニズムと自由民権デモクラチズムの思想に影響せられて、露西亞では農奴の生活状態を改善しようとする運動が識者の中に唱道せられて、國民もまた自己の位置を漸く自覺するやうになつて、農奴解放の叫びは國の四隅に響き渡るやうにな

つた。ツルゲーニエフが言つた『農奴權磐石の如く泰然として峙てり』とは最早や表面の状態であつて、事實農奴權はこの時既に龜裂を生じたのである。

露國政府は言論の自由を束縛し、檢閲を嚴にして新思想の傳播を防ぎ、只管解放運動を抑壓しようとしたが、時運の大勢を如何ともする事が出來ず、時の皇帝ニコライ第一世は農奴權の如き野蠻不正なる制度は到底維持すべきものでないことを看て、會議を開いて農奴問題の解決を討議し、農奴を解放することを國民に向つて誓約することになつた。千八百四十一年から四十六年に至る迄は、ニコライ第一世が農奴問題に就いて思ひを悩した時代であつて、その爲には諸種の勅令を發布したことが幾回であつたか知れない。千八百四十一年には、農奴をその家族と分離して賣買することが禁せられ、その翌年には農奴の義務令が發布せられ、四十六年には農奴放釋輕減令が發布せ

られた。この間に於ける彼等農奴社會の狀態は、たゞ徒らに其境遇に不平を鳴らし、地主の横暴に對して非を唱へつゝ騷擾の絶える事がなく、政府は幾度か武力に訴へて彼等を鎮壓しなければならなかつた。之に對し地主貴族等は己の利益のために極力農奴解放に反對した者が多かつたのは無論のことであるが、彼等の中には農奴權の不正不義なることを悟り慚愧に堪えない地主もあり、また農奴權破壊の爲めに奮闘努力することを誓つた貴族もあつた。それと同時に西歐の思想に動かされて人道を唱道する者もあれば、農奴の生活狀態を改善せんとして其手段を講じたものもあつた。かくの如く當時の社會は農奴權問題の爲めに騒がしい論議が絶えなかつた。

ツルゲーニエフも亦大地主の家に生れ、數多の農奴を所有する兩親を有つてゐたので、彼の進歩的思想は如何に激しくまた苦い經驗をその境遇に於て

味つたことであらう。千八百三十八年、青年ツルゲーニエフは獨逸に去るに至つたが、其故國を棄てるに至つた原因を後年追懷して次のやうに言つた。「余は故國を去ることの不利な事、余が生長した其の地主生活に固着せしめた總ての關係羈絆を斷つこと、不利な事は、自らよく承知してゐる。けれども如何することも出来ない……其階級、殊に其階級の中で余の屬したる地主の社會には何等余を制止するに足るやうなものになつた。之に反して、余が身邊に於て目撃するものは、殆ど皆余の心中に忿怒、不安、果ては嫌忌の情を起さしめたのである。最早余は躊躇逡巡することが能きなくなつた。或は兜を脱いで服従し、而して破壊せられたる道路をおとなしく地主の階級と共に歩み行くか、或は即刻背を向けて、數多の貴重なる物、親しきものを失ふか、此二つの中一は免れないものであつた。果せる哉余

はゼルマンの海に身を投ずるに至つた。此海こそ余を清浄ならしめ、余を新たに再生せしむべきものであつた。而して余が海波の中より潜り出た時余は矢張「西歐主義者」として現はれた。そして余は遂に西歐主義者であつた。余の同輩中には、余が採つた手段に比すれば、稍々積極的の他の手段に由つて、余が熱望したる其自由、其意識を捉へ得たる人々もあるけれど余は其等の人々を批難しようとは思はない。余はたゞ當時さうする外に道がなかつたのである。余は自ら憎しと思ふ者と相並んでは一刻も呼吸することが能きなかつた。余は一先づ遠かつて、遠方より一層猛烈に敵を攻撃せんが爲に、少時敵より遠かる必要を感じたのである。此敵とは余の眼底に判然たる姿を以て映じ、一定の名を帯びてゐた。敵とは則ち農奴權に外ならないのである。余は此の名目に向つて一切を集注し、此敵に反抗して

最後まで力戦し、決して和睦しないと誓つた。是れ余が年々歳々の誓であつた。余が西方に去つたのは、一に此の誓を首尾よく貫徹せんが爲めであつた。』

此時、彼は十九歳の青年であつた。十九歳の青年がこの確固たる誓を立てたのである。その苦衷と社會の暗澹たる状態とを察するに餘りある。彼は終生この誓を固守して變らなかつた。この年々歳々の誓こそ彼が四十餘年に亘る文學的活動の原動力となつたものである。大作家が美しい人道主義ヒューマニズムの觀念と農民に對する暖い同情とを傾注して著はされた不朽の名作『獵夫記』の創作の動機は農奴權に對する憎惡に胚胎したものである。

農奴權に鼓吹せられて筆を執つた作家には、ゴーゴリもある、ゴンチャロフもある、トルストイもある、オストロフスキイもある、またドストエー

フスキイも矢張さうであつた。皆この農奴權といふ社會問題からインスピレーションを受けたものであつた。ゴンチャロフは冷靜にそれを解剖した。トルストイは徒らに農奴が革命を叫ぶのを歎いた。けれどもツルゲーニエフは常に農奴に對する暖い同情と、農奴權に對する熱烈な憎惡の念を失はなかつた。

二

祖先と父母

イワン・セルゲーキチ・ツルゲーニエフは一千八百十八年十月廿八日、當時父の所屬聯隊が駐屯してゐた中央露西亞オルロフ縣のオリョール市の叔父の家で産聲をあげた。父はエリザヴェトグラード^{キラツシール}甲騎兵聯隊の大佐で、其名をセルゲイ・ニコラエウキチ・ツルゲーニエフと謂ひ、母はオルロフ縣のゾーシヤ河畔(トルストイの生れたツラ縣の界に近い)のムツンエスキイ市の附近

スバスコエ村の大地主の一人娘で、ワルワラ・ペトロウナ・ルトキノーフと言つた。

ツルゲーニエフ家は露西亞の貴族中で最も古い名門に屬して、其祖先は遠く十三世紀の初めに中央亞細亞地方から露西亞に侵入して「ソルタヤ、オルダ金族」の國を建設した韃靼種族の一人で、時のモスクワ王國の大公に出仕した或る君公セルヂから出てゐる。十七世紀の頃には、ツルゲーニエフの祖先は常に露國の都市で將軍の要職にあつた。十八世紀には學校だの陸軍に職を奉じたものがあり、また中央露西亞の領地で平和な地主生活を送つたものもあつた。其祖先の人々の中で、ペョートル・ツルゲーニエフは露西亞史上で闇黒時代と稱する千六百年代に、潜王僞デミトリイに宣誓することを拒んだが爲に斬罪に處せられ、ヤコフ・ツルゲーニエフは彼得大帝の道化役者で、ニコライ・ツルゲーニエフ

は『露國と露國民』と題する佛文の著書と其他政治經濟の著述とで有名であり、アレキサンドル・ツルゲーニエフは農奴權破壞の計劃と史料蒐集家として有名である。

ツルゲーニエフの父は騎兵將校で、骨牌、酒色に財産を蕩盡したので、四十歳の頃には家計が困難になつたために、丁度その頃貴族社會に流行したやうに富豪の婦人と結婚して、その苦境を免れようとしてゐたが、こゝに不思議にも小説的の事件によつてその希望を満たすことが出来た。それは彼がある時騎兵隊の馬匹購買員として、未來の妻ワルワラ・ペトロウナの領地なるスバスコエ村に来て、その産馬場から馬匹を買ひ入れたことがあつた。その時年若き女地主ワルワラは將校の風采よき姿を見て、親切に歡待を盡したのである。そして彼に骨牌の勝負をすることを勧めた。その勝負の條件は自分の

欲するものを勝手に要求するといふことであつた。セルゲイは勝つた。彼は遠慮なく、ワルワラの手を望んだ。女地主は快くそれを承諾した。かくして二人の結婚は成立したのである。この二人の夫婦生活は決して圓滿なものではなかつた。常にその家庭には風波の絶えたことがなかつた。セルゲイはイワン・ツルゲーニエフが生れてから間もなく軍職を退いて、妻と共にスバスコエ村に住居し、多数の農奴を虐待酷使して、豪華な生活を送つたのである。夫婦の間には三人の男の兒があつた。兄をニコライといひ、末の子はセルゲイといつた。イワン・ツルゲーニエフはその第二子であつた。

ツルゲーニエフの両親は一言で言へば、冷酷無情の人々であつた。ツルゲーニエフは憐れう言つてゐる。「余の母は哀れにも悲しい生活を送つた。断えず激して嫉妬の念強く、常に何事かをブツ／＼怒つてゐた。然しそれは父の留

守の間だけで、父の前では非常に父を恐れてゐた。父はまた嚴格に冷淡に構へてゐた……余は余の父ほど落着いた風を装ひたがる、自信強い専制的人を見たことがない。父は力士のやうな體格と熊のやうな腕力の持主であつたと。

父は魁偉な體格を持つてはゐたが、其性質は怯懦で、放縱で、客を招いて款待することが好きで、また大の狩獵好きであつた。母の性質は意地ツ張で、頑固で、地主の好模型で、残忍酷薄な女であつた。身の丈低く、容貌が醜く、背は屈し、長い巾廣な鼻には、皮膚一面に深い毛孔がある爲め恰度痘痕のやうであつた。兩眼は黒く、優しみがなく、毛髪は漆のやうに黒かつた。

母が其所有地スバスコエ村で執つた家政は、それはまた堪らなく尊大倨傲なものであつた。數千の農奴婢僕を幾多の位階等級に分けたのは宛然宮廷の

百官僚のやうであつた。家令を「宮内大臣」と名づけ、郵便物の發送受理を擔任する者は「遞信大臣」と稱へ、家庭は禮儀作法が嚴格で、倨傲尊大なる女地主は恰かも女王のやうに構へて、容易く人に面接もせず、また許可なくしては、何人も彼女に話し掛けることが能きず、若しそれを犯す時は、容赦なく嚴罰に處せられるのであつた。ツルゲーニェフは其回想録に慙う言つてゐる。

『例へば彼女の大臣中の一人が用件を伏奏する時には、畏まつて扉の側に立止つて女主權者が「言上しても可い」といふ氣勢を示すまで熱心にそれを待つてゐる。而して母が二分間もさういふ風を見せない時は、奏上してはならないのだと察して、直ぐに黙つて兢兢として退出する。郵便物の到着は通常大鐘を鳴らしてそれを報じ、次いで郵便脚夫が鈴を振りながら廣い廊下を走つて行くと、遞信大臣は規定の制服を身に纏ふて、郵便物を受取り、

銀製の皿に載せて、女主人公の室に運ぶのである。』

『曾つて母は帽子形に突起した硝子窓のある馬車ともつかず、聖像函ともつかない一種特別の駕籠様のものを製作せしめたことがある。それは當時猖獗を極めた虎列刺病の傳染を恐れて、外出する時外氣に觸れないやうに作つたものである。彼女は硝子窓の真下に安樂椅子を据えて其上に坐し、そして特に指定した農奴等に此駕籠を擔がせて街を歩き廻つてゐた。』
ツルゲーニェフの母が如何に殘忍な人であつたかは次の小話でもほゞ解ることであらう。

或る時ツルゲーニェフ家に朴柄な啞者のガラスムといふ者があつたが、女主人ワルワラの命に従つて、懐しき田舎の地から都會に出て慣れない門番を勤めなければならなくなつた。彼は村を去るに忍びなかつたが、主人の命な

れば是非もないと諦めて門番の職を辛棒してゐる間に、不圖そこにゐたタチヤナといふおとなしい召使に懸想して、遂に相愛の仲となつたが、これを聞いたワルワラは、故意とその召使を他の男に嫁がしめて二人の仲を裂いて了つたのである。失戀の苦を嘗めたグラシムは唯黙々として主人の命に従つたが彼の心は破れたのである。今は只小狗「ムム」が彼の煩悶を慰めて呉れる唯一の友となつた。彼がこの小狗を子供の如くに寵愛すれば、小狗もまた彼の傍を離れず附き纏ふてゐた。けれども悲しい哉、ワルワラは小狗が彼女に向つて尾を振らず、また吠聲が喧しいといふ理由の下に、グラシムに其犬を屋敷の中に置くことがならぬと命じた。グラシムは已むなく愛犬「ムム」の頸に石を括りつけて、水の中に投げて了つた。これは小説「ムム」の中に描かれた事で、實際の出来事を書いたものである。

またツルゲーニエフの家に一人の農奴の少年があつたが、ツルゲーニエフが獨逸へ留學する時、母はその従者としてその少年を選んだ。ツルゲーニエフは此少年が農奴には珍らしき才能を有することを認めて、大に彼の教育に意を用ゐたので、彼は忽ち獨逸語に熟達し、やがて試験を受けて或る醫科大學に入學することになつた。そこでツルゲーニエフは母に手紙を送つて、此の少年に自由許可證（農奴の義務を免すること）を與へんことを願つたが、遂にその願は徒勞に歸して了つた。で、ツルゲーニエフは彼に決して露西亞に歸國するなと勧めた。けれども或日彼が旅行囊と風呂敷包を肩にして馬車間屋に行くのを見て、ツルゲーニエフは驚いて恚う訊いた。

「お前はこれから何處へ行かうとするのだ。」

「國へ歸ります。」

『何故、お前には獨逸といふ花嫁があるではないか。』
『花嫁もいゝですけど、故國もまた戀しいものです。』
かくして少年はスバスコエ村へ歸つて行つた。これを聞いたツルゲーニエ
フの母の怒りは如何んなであつたらう。彼女はまたあらゆる暴虐を彼に加へ
たのである。或時は彼に書を教へて、朝から晩まで同じ花を描かせて、この
不幸な憐れな天才兒を苦しめたこともあつた。

三

幼年時代

千八百二十二年、即ち五歳の子供は兩親に伴はれて歐洲漫遊の途に上つた。
けれども餘り幼少なるツルゲーニエフには旅行によつて受けた感銘などはな
かつた。たゞこの旅行中瑞西のベルン市で、兩親と一緒に動物園に行つて、
熊を飼養してある穴を見物したが、如何なるはづみか、子供は誤つて熊の穴
に落ちようとしたのを、折よく父に救はれて、危い一命を取り止めた。また

この旅行中に幼いツルゲーニエフは大病に罹つて、既に葬儀の準備までもしたやうな事があつた。

旅行から歸つて後も、彼は母の冷淡無情と父の放縱との中に少年時代の日を送つた。ツルゲーニエフは後年になつて當時を回想して慙う言つてゐる。

「幼時を回想するに、余には一つでも喜ばしい光明的の回想がない。余の家は無法なる嚴格を以て支配せられ、余は母を恐れること火のやうであつた。聊かの事にも罰せられた。恰度昔の新兵のやうに酷待せられた。鞭打たれずして過した日は殆ど一日もなかつた。そして自分が大膽に、何のためか母上は余を斯の如く罰し給ふかと尋ねると、母はお定りのやうに「何故かは汝自ら知るがよい」と言ふのが常であつた。」

けれどもツルゲーニエフの心は、假令一言でも母親から優しい言葉を聞き

たいと常に願つてゐた。けれども母には我兒を憐むやうな心は露程もなかつた。かくて温順なる良少年ツルゲーニエフは、母の虐待無情に堪えず、いちらしくも両親の家を脱走せんと覺悟を定めた。

日が暮れると、家内の者は皆寢静まつて了つた。彼は必要の衣服と辨當とを包んだ風呂敷を提げ、四邊に心を配りながら、暗い廊下を手探りしながら、恰度鼯鼠のやうに忍び足をして逃げ出した。すると突然、彼の面前に現れ出したのは家庭教師の獨逸人であつた：教師は彼を連れて、子供部屋に入つた。そこで彼は獨逸人から淳々として其不心得を説き聞かせられた。それから後は、母の刑罰はいくらか薄らいだやうであつた。

彼は両親の暖かい愛を知らない孤獨の心を有つた少年であつた。彼は廣い園の奥の茂みに身を隠して、ひたすら美しい自然の懷に抱かれてゐた。

園は平坦なる高地にあつて、一寸見ると森のやうな形をして、永へに青葉の影うつ菩提樹や、樺の木の長い真直な並樹路、或は茂つた灌木に半ば覆はれた紆餘曲折した狭い小路が縦横にその中を通じてゐた。年を経た松、巨きな榎、雄大な樅が處々に散在して園の風致に一層の趣を添へた。池の中には魚が多く、鯉だの白楊魚だの、又は前世紀の魚だといはれるゴレツといふ魚までも見えた。水の邊には小さな楊柳が繁つて、彼方上の方には峻しい坂の兩側に小さな胡桃、接骨木、忍冬、野李の密林が隙間もなく連り、下の方にはすつとヒースが擴がつてゐた。處々には碧色の絹の様な細い草の生えた草原があつて、その中には菌が點々として薔薇色、百合色、藁色の小帽子をもたげ、または夜盲草の珠のやうな花がまばらに咲いて燃えるやうであつた。毎年春になると、鶯、目白等が木々に囀つて、遠く吐鵲の聲が聞える。少

年はこの人氣のない茂みの中に押分けて入ることを愛した。其茂みの中には、彼が愛する一定の場所、誰も知らない場所が二つも三つもあつた。

小説『プニンとバプリン』の中に描かれた農奴プニン（本名はフェオドル・イワーノキチ・ロバーノフといつた）は、よく少年ツルゲーニエフをこの茂みの中に誘つて、露西亞の詩人の作を読んで聞かせた。ツルゲーニエフは始めて祖國の文學を知つて偉大なる感銘に打たれた。外國の家庭教師ばかりに就いて、外國語ばかりを教はつた彼は、またこれによつて露西亞語の妙味をも知つたのであつた。

『プニンとバプリン』の中に次のやうな一節がある。

『プニンが好い時を見計らつて、恰度昔嘶にでもあるやうな隠者か善魔の様に、脇の下に重たさうな書物を挟んで、突然私の目の前に現はれて、長い

曲つた指をツツと振り、神秘的な瞬きをして、頭、眉、肩、全身を揺り動かしながら、園のすつと奥の、誰もあとを蹤けて來ることのない茂みの方を指した時、私の感じた印象はとても言現はすことが出來ない。さて私達は人知れず其處に入つて、並んで坐を占める。書物は早や徐ろに開かれた、當時の私には不思議な微と快い鋭い香ひを放ちながら。ヂーッと聲を呑んで、心待する時の胸騒ぎと感動を抱きながら私はブニンの顔を眺める。快い言葉が水のやうに流れ出る其の唇を見詰める。最初の聲が響いて來る：：四邊のものは寂然として消えたやうである。いや、消えるのではなく、跡に一種名狀することの能きない懐しい印象を残しながら、微かに薄い煙の中に包まれるやうだ：：ブニンが殊に好んで讀む詩は高調な詩である。彼はその詩の爲ならば一命をも惜まぬ意氣込みである。彼は讀むのではな

く、恰度泥酔者のやうに感極まつた調子で、ビシャ僧のやうに、鼻聲で高々と叫ぶのである。尙ほ彼は初めに詩を呟きつゝ小聲に口の中でモグ／＼言ふ癖がある。彼は其を稱して下讀みといふ。次には同じ詩を判然と歌ひ出して、突然跳び上つて、兩手を祈るが如くまた命令するが如くに振る。かくして私は彼と一緒に、ロモノソフ、スマローコフ、カンテマイルばかりでなく、ヘラスコフの「ロツシヤダ」迄も讀破した。實を言へば、この「ロツシヤダ」は、私を殊の外歡喜せしめたもので、詩の中には剛勇無双の女主人公たる巨大の韃靼女があつた。私は今その女の名は忘れたが、當時はたゞ其名を想ひ出しても手足が凍えるやうであつた。ブニンはさも意味ありげに頭を振つて言ふ。

「左様、ヘラスコフ——彼は容赦はなさぬ！時としては心を痛めるやうな句

に出會ふことがある……確かと掴まへよ……お前は彼を理解しようとしても、彼はもう向ふの方に行つてゐる。そしてプツ／＼と喇叭を吹く、恰度銅羅のやうに！それがためには絶好な名前が彼に與へられた。ヘラスコフとは面白ぢやないか！」

ブニンはロモノソフの詩を餘り單純放逸であると批難し、デルジャウインに對しては殆ど敵意を抱いて、彼は詩人といふよりも寧ろ宮人であると言つた。

私の家庭では、文學や詩歌には何等の注意を拂はなかつたばかりでなく、詩殊に露西亞の詩は、全く一種不作法な醜猥なものと思つて、母はこれを詩と言はず「ほめ歌」と言つてゐた。母の意見によれば、總て「ほめ歌」の作者は「飲んだくれ」かまたは全然馬鹿者であるといふのだ。』

かくてツルゲーニエフは、全然ブニンの感化を受けて、遂に「ほめ歌」を歌ひ始め、又自ら詩を作らうとした。その時出來た詩は「シャルマンカ」と言つた。ブニンはその詩を見て、一種の音聲の模倣があると言ひ、また題そのものが卑近にして叙情詩的聲調に副はないと批難した。

若きツルゲーニエフは他の子供のやうに玩具を弄ぶやうなことはなく、年に似ず眞面目な大人らしい態度を有つてゐた。頭は巨大で、兩眼はクル／＼と大きく、眼付は眞面目で、鋭く周圍のものに見入つて様々な質問を發し、何事にも興味を有つてゐた。

『余は少年時代には、人間の腦髓は單に皮膚と毛髪ばかりで覆はれたものと思つてゐた。余の頭蓋骨は友人が指頭で打つても、直ぐに頭痛を病むほど、脆く且つ感じ易かつた。』かう、後年になつて彼自身が言つてゐる。

少年時代のツルゲーニエフはこんなやうな子供であつた。彼の遊びで、一番熱心だつたのは小鳥を愛養すること、よく網や罾で小鳥を捕へて喜んでゐた。そして捕へた鳥は皆ある一室に草木を植込んで小さな園を造り、その中へ放つて置いた。此等の小鳥に餌を與つたり、又監督したりする役目を命ぜられた男は「獵犬」といふ綽名のある山番人であつたが、この男は脊が高く非常に瘦せて、足が細長かつたので、この綽名を貰つたのであつた。

スバスコエ村に住む樵夫や獵夫等は、好奇心に富んだツルゲーニエフの心を慰めようとして、鳥類の生活、鶉、鶉、鷓鴣、鷓鴣、鴨などの性質や習慣を話して聞かせたり、時には巢鳥を巢もろ共持つて來て、種類の特質を教へて呉れたりした。ツルゲーニエフは獵夫等の話に恍惚として、餘りの面白さに獵に連れて行つて呉れと頼んで、獵夫や村の子供と一緒に、森の中を徘徊したり、

沼を渡つたりした。かくて彼は山番人の銃を手にとつて射撃の術を覚え、初めの中は止り鳥を狙つてゐたが、後には飛ぶ鳥をも巧みに撃ち落すやうになつた。

年を経るに従つて彼は老練な狩獵家となつた。毎日銃を肩にして森林の中に分け入り、また近郊を歩きながら天地自然の美に憧憬れ、同時に露西亞の村落を觀察した。後年になつて彼の藝術的作品に、中央露西亞の自然が心ゆくばかり艶麗な筆を以て描かれたのもまた偶然ではなかつた。

ツルゲーニエフの母は相當の教育ある婦人で、平素は佛蘭西語で會話をし、また佛蘭西語で日記をつけてゐた位である。それ故子供の教育には相當の注意をしてゐた。當時の露國貴族社會の風習に従つて、其兒の教育は重に直接外國から招聘した瑞西人、獨逸人、佛蘭西人などの家庭教師に一任してゐた。

けれども此等の家庭教師は元來教育的素養少く、社會の劣敗者であつたから子供に對しても特別の感化を及ぼすことが出來ず、其結果の見るべきものがなかつたのは當然のことである。そして彼等の教へる學科は單に外國語の教授に止まつてゐた。

ツルゲーニエフと一緒に、兄のニコライも無情な母に鞭打たれつゝ生長し學問したが、兄はツルゲーニエフの爲めに英文の面白い小説を譯讀して聞かせた。弟のセルゲイは夭逝した。彼は病氣のために歩くことが出來ず、蛆蟲のやうに匍つて歩いたといふ。

四

大學時代

千八百二十七年の春、ツルゲーニエフの両親は、其子に高等の教育を授けるために、モスクワに家を買つて移轉して來た。そして當時九歳のツルゲーニエフはウエイデンガンメル氏の寄宿學校に入塾する事になつた。當時の露國の貴族社會では、其子弟を公立の中學校に入學せしめると、平民の子弟と一緒になつて風儀が悪くなるといふので普通の中學校を避けるやうな傾向が

あつた。が、ツルゲーニエフがウエイデルガンメルの塾にゐたのは暫くの間であつた。やがて彼はラザレフスキー高等學院の監督教師クラウゼ氏の私塾に寄宿生として轉校した。此の塾では盛名ある教師が揃つてゐたが、その中でツルゲーニエフが最も愛慕してその薫陶を受けたのはズベンスキーといふ露西亞文學の教師であつた。この教師は、教授には最も熱心の人であつて、また氣質の極めて潔白な人であつた。カラムジン、パーチユシコフ、ジユコフスキイなどの著作を講義して文學の根本義を教えてゐた。

クラウゼ私塾に於けるツルゲーニエフの文學教育は極めて顯著なる成績を示した。彼は此塾で英語に熟達した。そして今迄習つた佛蘭西語、獨逸語の知識と共に彼の智囊の資料となつて、西歐諸國の原書を研究玩味するやうになつた。彼は語學に於ては先天的の天才を有つてゐた。彼の外國語に精通し

てゐたことは、彼が後年小説を書くのに最初外國語で起草して後に露西亞語に翻譯するのだから噂されたほどであつた。彼はクラウゼ私塾に居る間も當時大學生で後に有名な詩人となつたクリューシニコフに就いて大學入學の準備をしてゐた。

千八百三十三年、ツルゲーニエフはクラウゼ私塾からモスクワ大學に轉じた。それは彼の十五の歳であつた。そこにゐたのは一年餘の間で翌年にはペテルブルグの文科大學に轉ずることになつた。

彼が入學した當時のペテルブルグ大學は、校風あまり振はず、教授等も平凡なる人物ばかりであつた。ツルゲーニエフが後年關係した文學雜誌『ソヴレメンニク』の編輯者であつたブレツニョーフ講師を除いては他に有名な人は一人もなかつた。そして大學生の大半は豪家の息子が多かつたので、學業

を顧みず、放縱な生活を送り、骨牌を弄んだり、酒に身を浸したりして不攝生な快樂を貪ぼる者が多かつた。ツルゲーニエフが此大學から受けた効果は非常に少ないものであつた。『獵夫記』の中の『シチグロフ郡のハムレット』の中に「大學生俱樂部」を攻撃した所のあるのは、この時分の學生生活を回想した結果であらう。

ツルゲーニエフは露都大學の講義を聴く傍ら、ペトロバウロフスカヤ學校の教師ウオルテル(有名なる羅典語學者)に就いて古代語を學び、千八百三十五年から二年の間ウオルテル教師と共に、ホレーシヨ、クシタ、ソフオクレースなどの古典を修めた。

ツルゲーニエフの大學時代に只一つ注意すべき事は露都大學のブレツニョーフ講師との關係である。講師は濃厚篤實、學生に對しては父の情を有つて

ゐたから、學生等も互ひに文學上の處女作を見せて其批評を仰いでゐたが、ツルゲーニエフもまたその處女作をブレツニョーフ氏に見て貰つたのである。彼は回想記の中で恁う言つてゐる。

『私は私の詩想の最初の果實中の一箇、即ち『ステニオ』(或は「父」ともいふ)と題する五韻長短詩の空想的戯曲をブレツニョーフ教授に差出してその批評を乞ふた。次の講義の時間に、教授は私の作とは名指さず、この作を解剖して、此の作には『マンフレッド』の乳臭い模倣があると言つた。歸りに門を出て外に出ると、不圖教授に逢つた。教授は私を側に呼んで、私がかういふ無駄事に時間を費したことを慈愛ある言葉で叱られたけれども、私には「或る天才がある」と注意せられた。私はこの一言に勵まされて、それから後も數篇の詩を見せたが、教授はその中から二篇を選んで、翌年千八

百三十八年の『ソヴレメンニク』誌上に掲載して呉れた。』

此の二篇の詩とは、『夕』と題して老いたる櫂の木を詠じたものと、『ウエネラへ』と題して希臘の神々を歌つた短詩で、匿名を以て掲げられた。而して最初に出たのが『夕』であつた。左にこれを譯して見よう。

夕 (感想)

波は斜なる河岸にまどろみ、

殘光煌々として天に燃えたり、

煙の如き霧を突きて小舟遙かに浮び去る、

悲しき感想と奇なる思ひに充ちて、

余は默然として岸上に立ちぬ。

畏敬すべき林の大王、老いたる櫂の樹は

縮毛の頭もてうつら／＼なる水の鏡面にのし懸れり、

沈黙と安息、夜と晝、光と闇の

流れ合ふあやしき時となりて、

大空朗らかに晴れたり。

萬物閑として響くものなし！四隣寂として動くものなし！

何處も沈々たる夢路——天も地も、

たゞ時に瞬時の波動水面を渡り、

或は風の息、或は微かに落つる木の葉の音、

何處も平安——されど我が心のみはさにあらず。

さなり、余は解せり、この聖き時に

自然は吾等に神秘の教へを垂る——

亂れたる我が心にその聲を聴けり、

内なる聖き不易の其聲を、

神秘なる未來の豫言者を。

周圍は墓場の如く靜かなり、

生きとし生けるものは不動の眠に落ち、

生命眠り、自然の力まどろむ、

其夜の靜謐は我が心に、

不思議なる思を起しぬ。

若し此の夢が未來に我等を待てる

その前兆ならんには如何に！

此處は光と闇の流れ合ひ、彼處は樂と苦と

忘却と死の流れ合ひ、

此處には夜と闇——彼處には？彼處には何かある？

我が心そはくとして不安なり、

瞳を凝して自然に問ひしも徒空なりき、

自然は熟睡して黙々たり、

たゞ一の被造物も存在の秘義を

知り得る力なきぞ我は悲しき。

この詩が雑誌に現れると、ツルゲーニェフは『此の詩こそ活字となつた我が最初の詩である』と言つて喜んだ。

此の時分彼はブレッツニョーフ講師の文學夜會に出席して、多くの文學者に逢ふことができた。此の會では當時の露國評壇の泰斗ベリンスキイ、コズロ

フなどを識り、また詩宗ブーシキンの馨咳にも接した。

けれども若年のツルゲーニエフは文學會に招かれても、大抵末席に小さくなつてゐるばかりで、當時露國のパーンスと言はれた民謡詩人コリツオーフ、ペリンスキイなど、二三の言葉を交すほかには、詩宗ブーシキンの姿を見て徒らに崇拜の念を高めてゐた。富豪の息子、貴族の青年學生として、上流社會と交つた彼は作家仲間に入つては全く臆病で始終黙り込んでゐた。

學生時代のツルゲーニエフは、毎年夏期休暇を故郷スバスコエ村で過した。そこでは農奴の憐れむべき境遇を見て、農奴權に對する憎惡が益々強くなつて、遂に堪らなくなつて母に向つて涕泣して其横暴を諫止した。此頃のツルゲーニエフに對しては母も非常な遠慮をしてゐたやうであつた。彼が傍に居る時は、流石の母も別種の人間となつたやうで、彼が歸省してゐる間は、總

ての者が心を安んじて生きた心地をするのであつた。だから彼の歸省は彼等には天來の幸福を望むやうであつた。彼の傍では母は何人に對しても刑罰の事を思ふことなく、實際罪ある者にも極めて寛大な處置を取つてゐた。

ツルゲーニエフ家には、ジトワといふ女があつてこの家の古くからの出來事をよく知つてゐた。彼女はこんな事を言つてゐる。

「私がツルゲーニエフ家にゐた時分の事を回想しますと、直ぐに頭に上つて來るものはツルゲーニエフに對する私共の尊敬崇拜の状態であります。あの方は故郷に歸ることは極く稀でした。けれども豫め何時歸るかといふ事が村中に知れ渡る時は、皆んなが十字を切つて喜び合つたのであります。

「吾等の天使が歸村し給ふ、今や吾等は幸福である、何事もないだらう。」
これは其の時農奴の間に傳へられる言葉でした。彼の温厚にして善良なる

性質の力は實に偉大なもので、この力は總ての者を征服し、總ての者を鎮壓しました：彼の周圍ではあらゆる虚偽不徳も跡を滅して影を見せません。彼の高い徳風と善良な性質の感化は、普ねく彼の周圍に漲り渡つたのでした。私は目の前に「ムムー」の悲劇を實見しました。ゲラシムの部屋に入ることを許されてゐたのは私一人で、私は「ムムー」を可愛がつて、よく食物を與りました：私は前後十八年の間、ツルゲーニェフ家に使はれてゐる女の子供等に書物を教へてゐましたが、教科書に使つた「ムムー」の結末の所を教へる時には、どうしても聲を出して通讀することが出来ず、潜然として暗涙に咽ぶのでありました。』

五

獨逸留學時代

千八百三十六年、ツルゲーニェフはペテルブルグ大學を卒業して得業士の學位を得た。翌年にはカンデダート(露國文官の第十級の官位で、我が學士に當る)の登用試験に及第したので、彼は更に歐洲學藝の叢淵といはるゝ獨逸に遊んで伯林大學に入學しようと決心した。吾人は彼が伯林留學中の生活を叙する前に、外國留學に出發するに至つた動機と、併せて當時の露國社會の

状態及文壇の状況を述べなければならない。

千八百三十年代は露國思想界の革命期、新舊思潮の交代期であつて、社會は騒然として渾沌たる有様を呈してゐた。此の時露國の才能ある青年等は、農奴問題の爲めに政府の壓制が特に酷烈を極めたゝめに、外國旅行免狀の下附を受くるには五百留の大金を要したにも拘らず、皆な争ふて外國へ遁れ、そこで健全な生活を營み、露國社會の暗澹たる状態を見まいとした。露國政府は新思想の傳播者たる文學に對して益々壓迫を加へた。外國旅行免狀の下附も次第に困難になり、大學は皆閉鎖せられるとまで噂せられた。人心は安堵せず、戦々兢々のうちに日を送り、大學の講堂に出て講義を聴く間にも人の讒誣を恐れ、故郷に歸つても農奴の慘状を見ては斷腸の思ひをした。見るもの聞くもの、一として息苦しく傷ましい印象を残さないものはなかつた。

けれども一度故國を脱して、歐洲の天地に足を入れると、彼地には高邁なるバイロンの詩歌響き、ヘーゲルの哲學系統創建せられ、何處の大學も目覺ましい活動を呈してゐる。露國に於て受けた教育が不完全で、眞の知識と學問は外國に仰がなければならぬと確信してゐる知識慾の盛んな青年が、去つて外國に赴くのは偶然ではない。ツルゲーニエフが大學を卒業すると直ぐ伯林に走つたのも道理である。

千八百三十年代に於ける露國文壇の事情を知るために、ツルゲーニエフの回想記の一節を引いて見よう。

『千八百三十年から四十年に至る間の露西亞には當時の西歐諸國の特別なる事情、特種なる偶然の影響を受けて、漸次一種の信念、其時代に於ては殆ど時期尙早と思はれる信念が形成せられた。即ち我露西亞國民は大國民た

るのみならず、泰然不動の大領土を有する國民である。それ故に其藝術も詩も當に此偉大と勢力とに相當する前驅者でなければならぬといふ信念である。確かに才能のある人々の一集合體が露國の文壇に現れた。是等の人の才能に通有なる特徴は、たゞ徒らに標榜を高くし、聲を大にして叫ぶといふことであつた。彼等は詩壇にも現れた、畫家の中にも現れた、雜誌記者の中にも、劇作家の中にも現れた。余は此等の人を總稱して偽尊大派又は偽古典派と名付けよう。然し此一派の露國文壇に於ける勢力は永續しなかつた。此の一派の作物は自信、自惚、自負心を以て貫かれ、露西亞帝國を讚美したもので、其實質に於ては何等露國のものをも有せず、畢竟故國の眞情を辨へざる偽愛國者によつて匆卒に且つ無鐵砲に築き上げられた一種散漫なる虚飾物に過ぎなかつた。』

千八百三十年代の文壇に於て、かういふ所謂偽尊大派と並んで、堅實な道を歩んだものは、ブーシキン、ゴゴリ、レールモンツフ、コリツオフ、ジュコーフスキイ等で、評家としてはベリンスキイが千八百三十四年の頃から明快なる批評の筆を揮ふやうになつた。偽尊大派の作家は此等の大立物とは決して歩調を揃へて進むことは出来なかつた。ベネヂクトフ、ヤズイコフ等の古典派、偽尊大派は踵を接して倒れ始めた。堂々たるベリンスキイの大論文は彼等を葬り去らすんば止まざるの氣勢を示した。

斯くて千八百四十年の頃から、新時代の曙光は益々光を放ち、其頃に至つて、露西亞全國に亘つて明確なる思潮の轉換は見る事が出来なかつたが、漸く未來を約するやうな思潮の變化が起り、何處ともなく社會の内部に一層刺激的な、一層健全なる空氣が動搖してゐた。

貴族の巢を脱したるツルゲーニエフは如何にベリンスキイの評論に刺戟されたことであらう。彼は人に劣らずベネヂクトフの詩を暗誦してゐた。或朝ある學校を訪問すると、其友は『テレスコープ』誌上に詩宗ベネヂクトフに向つて大膽に筆鋒を差向けた批評家があると言つて憤然として怒つた。この論文の筆者こそベリンスキイ其人であつた。ツルゲーニエフは時を移さず雑誌を購つて來て讀んだ。彼の心中には憤慨の情が勃然として起つた。けれども不思議にも其論文を讀み了つた時には、彼の心中には不本意ながら何物かベリンスキイの所論に同意を促すものがあつた。遂に其論旨の否む可らざる確説なることを發見した時は彼は愕然として驚き、多少残念の思ひに堪えなかつた。彼はこの意外なる印象に慚愧の情を催し、内心の情を壓伏せんと努めて、朋友と會つた時は極力ベリンスキイ其人と彼の論文とを攻撃した。け

れども心の奥底には何物かあつて、『彼は正當なり』と猶ほ耳語して已まなかつた。果せる哉、其後暫らくすると、彼は最早ベネヂクトフの詩には手も觸れなくなつて了つた。當時ベリンスキイが述べた意見、一時は徒らに斬新奇抜のものとして迎へられた意見はやがて社會の均しく承認する所となつた。

ツルゲーニエフが故國を去つて外國へ赴かうとするに至つた動機は、前に述べた露西亞の社會の壓迫に外ならなかつたが、彼が熱望した外國留學を決行するに當つては、様々な困難が彼の前に立塞がつた。

大地主の息子として、彼は金錢には、何等の不自由はなかつたが、恰度この時彼の母はペテルブルグへ移住して來て、偶々長兄ニコライが結婚の事で母と不和を生じた時であつたので、母は唯一人のツルゲーニエフを異郷に送

ることを欲しなかつたのである。けれどもツルゲーニエフは母を説いて外國留學の途に上るとになつて、早速旅装を調へて、愈々汽船「ニコライ一世」は彼を乗せて獨逸リューベック港を指して解纜した。この時の彼の喜悅は如何なであつたらう！時は千八百三十八年の陽春、彼は正に十九歳の青年、身體は強健で、生活上には何等の不足のない彼は、今や學藝の叢淵たる伯林に向つて出發した。前途には耀々たる光明が輝いた。航海中、不幸にも汽船「ニコライ一世」はトラウエシユンデ港の近海で火を發して、彼もまた獨逸海の底に沈まんとしたが、漸く救助ボートに乗つて死を免れることが能きた。留學の門出に逢着した此の災厄は千八百八十三年彼が病床に呻吟しつゝ、死する一箇月前に執筆した美しい「海上の火事」の材料となつた。

ツルゲーニエフは伯林に居る間に、千八百四十年に一度歸國したばかりで

その間には伊太利、獨逸の片田舎や瑞西の各地を旅行して歩いた。

彼は回想記の中に留學當時の事を述べて次のやうに言つてゐる。

「余が伯林に行つたのは前後二回であつて、其間二箇年餘の歲月であつた。

伯林大學の講義を聽いてゐた露西亞人の中で主なる人を擧ぐれば、一年目にはスタンケーウイチ、グラノーフスキイ、フロロフ等の人で、二年目には後年最も名を揚げたバクレーニンが來た。余は哲學、古代語、歴史を學んだが、中にもウエルデル教授に就いてヘーゲルの哲學を熱心に專攻した。余は伯林に於て、ツュレント教授から羅甸文學、ポック教授からは希臘文學史の講義を聽いたが、余はこれらの兩語の知識が非常に貧弱な事を發見して、家に於て羅甸希臘の文典をやり直す必要のある事を感じた。余が露西亞の大學で受けた教育の如何に不完全であつたかは、この一事で分る。そ

れでも余はカンヂダイトとしては決して劣等な者ではなかつたのである。』ツルゲーニエフの伯林生活は愉快なものであつた。學友フロロフの家は常に露國留學生の集会所となつた。彼等は當時の流行に巻き込まれて、骨の髄までもヘーゲルの哲學に感染して、寄れば必ず哲學の問題で談論風發といふ有様であつた。

かくして二年餘の月日は夢のやうに過ぎ去つた。その間にたゞ一つ悲しむべきことは親友スタンケーウイチを失つたことであつた。

バクレーニン、グラノーフスキイ、スタンケーウキチ等の西歐主義者との交際、獨逸で受けた教育、外國旅行から受けた印象、獨逸農民の境遇などがツルゲーニエフの人生觀及思想上に及ぼした影響は決しい少ないものではなかつた。留學以前にも彼は西歐主義者ではあつたが、親しく外國の生活を生活

した彼は最早や過激なる西歐崇拜家となり、全く「泰西人」となつて了つた。留學中彼は獨逸農民の社會に於ける地位、其幸福なる境遇を、故國に於ける農奴の全く無學蒙昧にして悲しむべき状態に比較して、潸然として暗涙に咽び、激しい忿怒の情に燃えたのである。彼が故國に歸つた時は、農奴權に對する不俱載天の仇敵となつてゐた。

千八百三十四年代に於ける露國上流社會の青年が討論談議に耽る習慣は前代未聞のことであつた。人生の意義如何とか、生活の興味とは何ぞや等の問題は常に討論の中心となつて、神の有無、靈魂の不滅、國民性の特質、人生の目的、個人の權利、義務等の如き實際と餘り交渉のない抽象的大問題に就いて、互ひに議論を戦はして之が解決を求めた。總て此時代の才能ある人々は驚くべき雄辯と討論熱とを有して、一度口を開けば殆んど寢食を忘れて數

晝夜議論を續けて倦まなかつた。時に大問題に逢着すれば數週間乃至數ヶ月の長きに亘ることもあつた。もと討論に依つて精神上の慰安を得んとするの目的であつたから、事々物々盡く話題となるのであつた。現實の嫌忌すべく、未來の定めなき事、何事にまれ生氣ある事業の缺如せること、當時の露國の教育ある社會が滔々として物質的苟安に流れた事、自由の渴望、ヘーゲルの哲學を基礎とした談話等は當時の好話題であつた。

バクーニンは安樂椅子に肥大な體軀を横たへて、玉を轉ばすやうな劉亮たる美聲を鳴らして、ヘーゲルの哲學を語り出す。けれどもそれは單に暗誦するばかりで大小の問題に關しては敢て解決を下さなかつた。その姿勢、その音聲、其態度には何處にか英雄的の風采があつた。かの『ルーデン』の主人公はこのバクーニンをモデルとした物であつた。スタンケーウキチは性質温厚

で風采が至つてよい。彼が窓際に寄つて病人らしい顔に微笑を浮べながら歡喜に満ちた眼を開いて醇々として語り出すと、當時は尙ほ一書生に過ぎなかつたツルゲーニエフも先輩の禮を以てその話に聞き入るのであつた。グラノーフスキイはまた沈思的の眼光を放ちながら銀鈴のやうな雄辯を揮つた。

眉目清秀なるスタンケーウキチは間もなく此世を去つて、その美聲を再び耳にすることが出来なくなつた。けれどもやがてその代りに彼等の群にはベリンスキイが出て來た。ヘルツェンが出て來た。ベリンスキイは眼を光らして室内を前後左右に歩きながら、極めて激昂した態度で、ツルゲーニエフのやうな富豪の子弟を攻撃し、彼等の無爲無能にして徒らに純藝術に憧憬れるのを罵倒して止まなかつた。ヘルツェンは思想界の革命者として彼等青年に偉大なる感化を與へた。

六

仕官

獨逸留學から歸つて來たツルゲーニエフは、直ちにモスクワなる老母に逢ひに行つた。それは恰度母の健康が漸やく衰弱に傾いてゐたからである。彼はモスクワ大學の哲學の講師にならうとしたが、當時のモスクワ大學には恰度哲學の講座が撤廢されてゐたから其目的を達することが出来なかつた。

モスクワでは、彼は當時露國に勃興しかけたスラヴ主義の宣傳者たるアク

サーコフや、ホミヤークフ、キレエーフスキイ等の詩人と交を結んだけれども、彼はもと激烈なる西歐主義者であつたから其交も永く續かなかつた。矢張り露都に集合してゐたベリンスキイ、ヘルツェン、グラノーフスキイなどの人々と交を續けてゐた。

やがて彼はモスクワ市を去つて故郷スバスコエ村に歸省したが、この時一場の悲劇が演ぜられることになつた。それは母と彼との一生涯の不和を招いたことである。これ以來母はツルゲーニエフを憎んで死ぬ時までその罪を許さず、ツルゲーニエフも之が爲めに忽ち生れて始めての生活上の困難を感じることになつた。今その真相を語らう。

ツルゲーニエフが歸省する時、母は女心の淺墓にも息子の歡心を買はんために盛大なる歓迎を催すことにして、男女數千の農奴を門前の並樹道の兩側

に整列せしめて、村の處々には騎馬の奉迎者を置いて、ツルゲーニエフの姿が見えるや否や直ぐに馬を飛ばして報告に来ること、そして鐘が鳴つたら農奴等は一齊に萬歳を唱へるといふ手筈にして置いた。ツルゲーニエフはこの盛大なる歓迎の有様を見て、甚だ快からず、遂には沸然として忽ち馬の首を回して露都へ去つて了つたのである。

この事件が即ち母子の不和を生じた原因ではあるが、然しその原因を全部この事件に歸して了ふ譯には行かない。二人は全然その性格を異にしてゐたからである。永久に親和すべからざる性質を有つてゐたからである。母の方では息子が西歐諸國に遊學し、各國の學者先輩と交はつても、露國貴族の根本的政策とも稱すべき農奴權や代々母の家庭を支配し來つた思想に何等影響を及ぼすものではないと思つてゐた。それにも拘らずツルゲーニエフは大學

で破壊的思想を養ひ、則ち母が抜く可らずと思つてゐる根本觀念を排撃することを以て己が本分とするやうな思想を發見して、母は今更の様に驚いた。斯の如き正反對の思想を有する親子の間に意見の衝突のあるのは當然のことである。要するにこの不和を生ずるに至つた原因は一朝一夕のことではない。長い間の兩思想の葛藤が偶々前に述べたやうな事件に逢つて爆發したに過ぎないのである。

この不和を生じて以來は、ツルゲーニエフは母と對面することも出来ない勤當の身となつた。母は彼に向つて従前のやうに必要な金品を與へることを止めて了つた。ツルゲーニエフは忽ち金錢に不自由を感じ、已むを得ず生活の道を求めなければならぬ境遇になつた。千八百五十年母が死ぬる時までには彼の困窮時代であつて、この間未來の大作家は連日饑餓に苦しめられ、晝

食する金さへ持たなかつたことも度々であつた。

彼は露都ペテルブルグへ来て、再び大學の教授にならうとしたが、またもや失敗に終つたのである。

彼が何故に大學教授たる希望を抱いたかは勿論生活の爲ではあつたが、また他の理由もないではなかつた。それは嘗つて伯林にゐた時分、敬愛する友人のスタンケーウキチが、露國に於ける第一の急務は、農奴を奴隸の状態より救ひ出して彼等の社會に教育を普及することであると言つた。ツルゲーニエフもまたそれを痛切に感じて、露西亞を愛する者は宜しく他に率先して民間に教育を普及しなければならぬと語つた。其時スタンケーウキチはツルゲーニエフ、グラノーフスキイ其他の人々から、全力を擧げて此の高尙なる目的に獻身的に従事するといふ嚴重なる誓約を取つたのであつた。

42
17
24

此の約束に由つて、ツルゲーニエフは歸國するや否や、職を教育界に奉じて、農民の開発に努力せんと期したのであるが、不幸その希望は水泡に歸して了つた。けれども彼が作家となつて後も、農奴解放に伴ふ農民教育の問題は常に彼の腦裡を往來してゐた。

生活上餘儀なき事情に迫られた彼は、千八百四十二年、露國內務省の一屬吏となつて文書課長ダーリの下に勤めることになつた。課長ウラヂイミル・ダーリは『大露西亞活語字典』の編纂者であつて、またカザーク・ルガンスキイといふ匿名で國民文學を鼓吹して多少文壇に名を馳せた作家である。氏は清廉なる人で、事務には敏活で、且つ實行的の官吏であつたけれども、非常にやかましく、やであつたから、職務に熱心ならざるツルゲーニエフは絶えずその怠慢を責められてゐた。ツルゲーニエフはそんな事は平氣であつた。盛んにバ

イロンの詩を歌つて人を驚かした。佛蘭西のジョルヂ・サンドの農民小説を愛讀して喜んだ。また其頃は盛んに短詩を作つた時分で、彼の詩は續々として雑誌の上に現れた。

ツルゲーニエフは三度び長官から譴責を受けた。その時彼は斷然意を決して、今後は如何なる事があつても再び官吏とならぬと決心して在職二年餘で辭職して了つた。その時は負債が積んで山のやうであつた。元來金錢の事は疎い彼の事だから文學的作物の爲に得た報酬すら貧困の友と分つのを常としてゐたので、今や身に一錢の貯へなきのみか麵麩の屑すら手にする事ができないといふ危急な状態に陥つた。其時彼は如何にも奇妙な計をめぐらしたのである。それは士官町に或る獨逸人の割烹店があつて、幸ひ其所の品が安上りに行く所から、彼の友人等は毎日のやうに此處で午餐をするので、ツル

ゲーニエフは話相手といふ體で、其處へのこゝとやつて來ては彼等と話を交へ、平氣な顔で卓上の麵麩を取つては片つ端から平らげるのであつた。これが彼の一日中の食物であつたのだ。所が割烹店の老僕で、顔は皺だらけに、腰もくの字形な爺がこの様を見て、或時ツルゲーニエフが店から出るのを捉へて、口をびつたり耳に押付けて、

『旦那様、一寸あの……食卓のパンを私が食つたかのやうに、亭主は何時でも私を叱りつけてゐますが、旦那様、貴方は随分罪が深うございますよ。』

ツルゲーニエフは別に返事はしなかつたが、我と我が心に深く問ふて見た。『私は今此の老僕の冤罪に報ゆると言つても、何も有たない。と言つて彼れの爲に私が何か報ゆるまでに懐の暖まる頃は最う此の老人はこの店にはゐないし、はて如何したものだらう。』

ツルゲーニエフの困窮は斯の如きものであつた。かくて彼の眞の處女作ともいふべき『バララシヤ』は千八百四十三年に出版されて、彼は偉大なる文學的生涯の第一歩を踏み出したのである。

ツルゲーニエフ

七

初期の作物

ツルゲーニエフの創作は、彼が露都大學に在學中、『ステニヲ』を書いた時から始まつてゐる。千八百四十七年の春、『獵夫記』の一篇が世に出るまでの間を、吾人は假りに彼の創作の第一期時代と呼ぼう。この第一期は畢竟彼の試作時代で、ツルゲーニエフが自己の文學的才能を試験して見た時代である。この時代の作物を通覽して見ると、彼は確かに最初は詩人たらしとの希望を

抱いてゐたものと思はれる。少くとも自己の才は詩にあると期してゐたやうである。彼は初め韻文の小説を書いた、數多の短詩を作つた、又戯曲をも試みて見た、中には散文の小説もあつたが。かくも様々の方面に手を着けたが彼は其作に一つとして満足することが出来なかつた。其の辿りつゝある道には闇が深かつた。彼は徒らに跪いた。

千八百四十三年の四月、彼が最初の長篇『バラシーシャ』が、匿名を以て單行本となつて出版せられた。全部六十九節から成る韻文小説である。

『バラシーシャ』バラシーシャは可憐の少女で、中央露西亞の或る地主の獨り娘であつた。或る日、裏手の畑に出て見ると、ゆくりなくも其處に一人の獵夫が楽しき午睡を貪つてゐた。

獵夫は眼を覺してバラシーシャの家に来て、故意と時間を尋ねたり、自分は隣りの花園の某であるなど、話をして、聽て再來を約して去る。これがバラシーシャの戀の端緒となる。

此獵夫といふのは、名をウイクトルと言つて、無妻の退職軍人であつた。其後、ウイクトルが再びバラシーシャの家を訪れた時、二人は相携へて庭園を散歩する。時はすがすがしい夏の夕べであつた。二人は早や深い戀に落ちた。が、ウイクトルは既う年を取つて、女といふものには初心ではなかつたので徒らなる淡い戀を喜ぶやうなことはなかつた。心の中ではバラシーシャの初心な娘心を冷笑してゐた。バラシーシャはまだ漸く二十歳、強いくゝ初戀の煽に燃えたのである。作者はバラシーシャの愛が圓滿なる結果を得るや否やを氣遣つて、バラシーシャは今後幾多の胸中の波瀾に逢着するであらうと危ぶんだ。

バラシーヤの親はウイクトルの性質を知つてゐたから、彼を變人として嫌つてゐた。話は此處で切れてゐる。

四年の年月が経つてから、作者が、バラシーヤの家を訪ねて見ると、バラシーヤとウイクトルとは既う夫婦になつて、平和な地主の生活を送つてゐるのを見て驚いた。作者は言ふ、初めの間ウイクトルはバラシーヤを弄んでゐたが、次第に其戀は眞面目さを加へて終に結婚したのである……バラシーヤの老父は、若い夫婦のために、立派な昔風な大きな家を建て、やつた……

「バラシーヤ」には、大天才の出現を思はせるやうな傑出した所もなく、また異常な文學的特徴も見えなかつたが、露國の文壇に多少の反響を起したのは、一にツルゲーニエフの西歐崇拜の痕が、此作に於て遺憾なく發揮せられ

てゐたが爲めである。有名なる批評家アンネンコフ氏（一八二一——一八八七年）を初め多くの評家は、此作を目するに、西歐の教育を受けた畸形的產物に外ならぬと冷評した。平生西歐崇拜の思想に不快を抱ける意地悪い連中は、ツルゲーニエフに向つて人身攻撃までもするやうになつた。

彼は「バラシーヤ」を公にしてから、故郷スバスコエ村へ歸省して、楽しい銃獵に日を送つてゐた。歸省中、彼は最も眞面目な著作と信する「バラシーヤ」を母に読み聞かせた。母はそれを聞きながら、頻りに欠伸を續けてゐたが、終には頭を振りながら憊う言つた。

「妾には解りませんよ。お前さんが作家なぞにならうといふのは、一體如何した了簡なのです。名譽ある貴族のすることせうか。作家なぞといふものは、書記と同じ仲間です……貴族ならば貴族らしく官吏となつて名を成すが

宜しい。紙の上に塗りこくつて……誰が露西亞語の本などを讀むものですか。』

『でも、母上はジュコーフスキイの詩をお讀みなさるではありませんか。』とツルゲーニエフは訊いた。

『あゝ、ジュコーフスキイは別です——どうしてあの詩人は尊敬しなくてはなりません。あの人が宮廷詩人としてどんなに立派な人であつたかはお前も知つてゐるでせう。』

かくて其年も五月となつて、ツルゲーニエフが毎日のやうに待つてゐた、評壇の大家ベリンスキイの『バラシヤ』に對する批評が、愈々『アターチエストウエンヌイヤ・ザビースキ』誌上に現はれた。ツルゲーニエフは波打つ胸を抑へて、慌しく雑誌の縁を切りながら、その一文を讀んだ。讀み終ると彼は

精神恍惚として慄う叫んだ。『これ余にとりて「燭の洗禮」である。』と。

ベリンスキイはその論文の中で慄う言つてゐる。

『此の詩の文體に據つて見るに、作者は非凡な詩才を有つてゐる。眞實なる

觀察眼、露國生活の奥底より掘み出した深刻な觀念、情味に満ちた微妙な

反語——此等の特徴は、作者の創作力が豊富で、其の胸中に現代のあらゆる

悲哀と問題とを藏してゐる時代の子であるといふ事を證するものである

……多くの人は詩中に、ブーシキン——殊にレールモンツフに模倣した痕

跡があることを發見するだらう。然しこれは怪しむべき事ではない。何と

なれば文藝上に於ける事象の生ける歴史的連續は、常に冷淡にして精神な

き模倣と混するものであるから。然しながら苟くも思慮ある人は、故國文

學界の偉人の必然的影響を受けて、先輩が既に社會に文學上に確立して置

いたものを自己の作中に表現すること、單なる奴隸的模倣とは全然別物であることを了解してゐる筈である。前者は、生氣潑瀾たる才能の發現したもので、後者は無能の證である。』

西歐の色彩を以て描かれた『バラーシャ』に向つて、スラヴ主義者が盛んに批難する中で、ベリンスキイの如き大家が、新進作家の作を誠實に批評し、作家としての才を認めて、文壇に推舉したのであるから、若きツルゲーニエフにとつては、何よりの奨励であつた。

『ベリンスキイの批評は余の勇氣を十倍にした。余は全世界の人から愛せられたやうな氣がする！余は誓つてベリンスキイの友となり、また弟子とならう！』と、彼をして叫ばしめたのは無理ならぬ事である。

かくて、彼は千八百四十三年の夏、故郷を去つて、露都に出て、直ちにベ

リンスキイを訪問したのである。

『バラーシャ』に對するベリンスキイの批評は、今日から見れば、甚だ過賞に失した嫌がある。不必要な諧謔、行文の冗長、戯曲的場面を飾るべき色彩の稀薄なこと、熱情に乏しく、藝術家たる素養の未熟なこと、これらが、この作を讀んで、吾人の感ずる所である。然しながら、ベリンスキイがこの作によつて、天才の出現を豫測したのは、流石に評壇の大家である。

『バラーシャ』によつて、多少文壇に認められたツルゲーニエフは、續いて諸種の創作を公にした。而して一作出づる毎に、多少の反響を當時の文壇に與へるのを喜んだ。然し作物そのものには、彼は決して満足することが出来なかつた。第一期の諸作の根柢に横はるものは、露國の現實界に不満を抱けるレールモントフ流のロマンチックな人生觀である。然しながら此の傾向は

42

單に一時の熱情、彼が創作の理想主義的の時代に過ぎなかつた。

『對話』は千八百四十五年の作で、千八百二十年代と四十年代との露國社會の代表的人物を對照した韻文小説である。批評家スカビチエーフスキイは「吾人は此作に於て、既にドン・キホーテ式人物とハムレット式人物とを見ることが出来来る。此二種の典型は、ツルゲーニエフの作に現はるゝ人物全體の根本系統である」と言つてゐる。又散文小説『ベーツシュコフ』、戯曲『無一文』、『細い所は斷れる』等には露西亞文學史上で、ドストエーフスキイが創始した感傷的自然主義の傾向に走つたのを見ることが出来る。此時代の短詩だの韻文小説などに關して作者は後年こんな事を言つた。「私は自分の詩に關して痛切に殆ど生理的に嫌惡を感じる。そしてこの詩の一冊たりとも今所藏してゐるものがない。そればかりか私はその詩集の存在を世界から斷つたためには、ど

んな高價なものを拂つてもよい。」と。短詩には、『夕』を始めとして四十餘篇の作があつて、描寫の點に於ても、思想に於ても、情調に於ても、稍々見るべきものがあるが、詩の要素たる簡素と力とを缺いてゐる。そこでベリンスキイもツルゲーニエフには詩的才能がないと斷じてゐる。またツルゲーニエフ自身も自己の才能が詩には適しないと悟つてゐた。彼の詩には叙事詩的説話と、自然の美を詠じ、天然の風物を描いたものが多い。この叙景の技倆こそ彼の全著作を通じて彼の文名を世界的ならしめたもので、この技倆は早くもこの時代に於て窺ふことが出来るのである。

以上掲げた外に、第一期に屬する作物には韻文小説『地主』、『アンドレイ』、『散文小説』、『アンドレイ・コロソフ』、『決闘者』、『三つの肖像』、『猶太人』、戯曲『不注意』等がある。

ベリンスキイとの交友

『バラシーヤ』を出版して、評壇の泰斗ベリンスキイから豫想外の稱讃を受けたツルゲーニエフは堪らなく嬉しく、直ぐにベリンスキイを訪問して親交を温めた。當時の事を彼は回想記の中で恣う記してゐる。

『千八百四十三年の夏、故郷スバスコエ村からペテルブルグへ出て、余はベリンスキイを訪問した。彼は間もなく結婚の爲めにモスクワへ去り、後レ

ィスノイの別荘に住むことになつたので、余もまた其地に別荘を借りて、其年の秋まで毎日のやうに彼を訪問してゐた。余は彼を衷心より愛し、彼もまた余を愛して呉れた。

『余が彼と交を結んだ時、彼は懐疑に苦しんでゐた。余はこれまで此の懐疑なる語を屢々耳にし、また自身でも此語を用ひたことがあるが、ベリンスキイに於て始めて此語が適確な意義を有することを知つた。彼こそは眞に懐疑に苦むものといふべく、懐疑のために不眠症に陥り、食を忘れた。懐疑は彼を飽くまでも悩ました。夜となく晝となく自ら我が身に人生問題を課して、之を解決せんと悶えながら、片時も我を忘れることが能きず、身心の疲勞するのをも知らなかつた。ある時余が彼の室に入るや否や、彼は瘦せ細つた身體(彼は左胸に肺炎を病んで、一時は危篤に瀕した)を安樂椅

子から起して、殆んど聞えないやうな蚊のやうな聲で、前夜中止して置いた議論の續きを話し掛けるのであつた。彼の兩頬は紅色を呈して、脈搏は一分間に百を打ち、絶えず咳をしてゐた。余は彼の誠實な態度に感動させられた。彼の熱火は余にも傳へられた。けれども二三時間も語り續けると根氣が盡きて、休息を欲する。散歩でもして氣を晴して晝食を食べたがる。夫人は醫師の忠告があるからと言つて、暫らく議論を中止して氣を休めたらいゝでせうと勸める。けれども彼に議論を止めさすのは却々に骨の折れることであつた。『我々はまだ神の有無に關する問題を解決してゐない。然るに君は飯が食ひたいとは何事だ。』と言つて、よく余を叱り飛ばした事もあつた。

『幸ひに満足なる議論の結末を得ることがあれば、彼は漸やく心を安め、諸

種の重要問題に就いて沈思するのを止めて、平生の業務に就いた。彼が余と談話するのを好んだのは、余が二ヶ年半を伯林に留學して、ヘーゲルの哲學を専攻して歸つたので、最近の學說を彼に聞かすことが出来たからである。』

ペリンスキイはツルゲーニエフに對しては父兄の情誼を有つてゐた。貴族流の習慣や、虚榮心や、それからあまり饒舌だといふので、よくツルゲーニエフを責めた。或る時ツルゲーニエフは友人のネクラソフから若干の金を借りたことがある。ネクラソフは露國近代詩界の明星と仰がれた人であるが、青年時代には非常な艱難辛若を嘗めて、一時は乞食とまで落魄したことがある。此の時も彼は決して富んではゐなかつた。そこで大地主の息子たるツルゲーニエフがかゝる貧しい人から金を借りた事をペリンスキイが耳にしたの

で、彼は直ちにツルゲーニェフを訪ねて行つた。恰度その時ツルゲーニェフは晝食をしようと思つてその金を持つて料理店へ出掛ける所であつたが、ベリンスキイは貴族の子弟等が豫て料理店で會食をするといふことを耳にしてゐたから、直ぐにツルゲーニェフを捉へて、

『君は何故貴族の振舞をするのだ？人に金の無心をして、その金で他人に恩を施すよりは、寧ろ自ら労働して金を獲るのが遙かに貴いではないか。ネクラソフは君に斷ることも出来ないから、きつと高利の金でも借りて君に立換へたものに違ひない。それも已むを得ない事情で金が要るといふなら兎も角だが、料理店で巾を利かさうとは何事だ。』

かく面と向つて責められたので、ツルゲーニェフはたゞ赧くなつた。

『そんなに言はなくとも可い。僕は何も罪を犯してゐるのではない。では此

の金をネクラソフに返さう。ツイ無分別を起したのだから。』

そこでベリンスキイもよく將來を戒めて彼の反省を促した。

ベリンスキイはよくツルゲーニェフが怠惰で身に締りのないのを責めた。千八百四十八年の晩秋ツルゲーニェフが故郷からベテルブルグへ出て来て、『ソヴレメンニク』誌の再刊を祝して賀辭を述べた時、ベリンスキイは彼に向つて、

『君は口先ばかりの撻揆をせず、宜しく實際の行爲に現はして共同の實を示し給へ。』

『僕は將來「ソヴレメンニク」誌の熱心な同人たることを誓ひます。』

『君のその誓は、丁度君が故郷に歸る時今度ベテルブルグに来る時は本誌の爲めに作をして来て渡すと言つて今だにそれを實行しない、その種のもので

ないか。』

かうペリンスキイは皮肉を言つた。そこでツルゲーニエフは慌て、

『その小説は既う脱稿して手許にある。が、たゞ推敲してないだけだ。』

『一時逃れを言ふよりは、潔よく其小説は未完だと言ひ給へ。』

『一週間以内で必らず脱稿することを誓ふよ。』

『君等は種々な辭柄を弄するが、其の行爲に至つては一指も動かすことを欲しない種類の人間だ。余は君等の性格をよく知つてゐながら、君に寄稿を頼んだのは間違つてゐた。ツルゲーニエフ君、君が若し此の度破約すれば、以後は一切「ツツレメンニク」誌上では君を除外する。また君と僕との交もそれまでだと思ひ給へ。』

ツルゲーニエフはこの威嚇を聞いて微笑した。そしてその翌る朝から執筆

し出して、一切外出もせず、人の訪問をも謝絶して一生懸命に書いて、ペリンスキイとの約束を實行した。

また或る時は、ツルゲーニエフが上流社會の集合で、紳士淑女に向つて、自分の著作に對する原稿料は一切之を受けないと吹聴したといふ事を聞いてペリンスキイはまたツルゲーニエフを叱り飛ばした。

『ツルゲーニエフ君、君は何故そんな愚かな事を言ふのか。労働して其報酬を受けるのは果して恥辱だらうか、但しは君の心情としてそんな事を紳士の本領と考へてゐるのか?』

ツルゲーニエフは只黙つて自分の言葉を悔ひた。

ペリンスキイのやうに、眞卒で氣品高く、直言して憚らぬ君士を親友に有つたツルゲーニエフは幸福であつた。彼の青年時代は随分多くの缺點を有つ

てゐた。それは露西亞人特有の怠慢、無責任、放縱などいふものである。借金をして期限内に返さなかつたり、直ぐに返事をしなければ先方に非常な迷惑を及ぼすやうな手紙に對して返事を書かなかつたり、また約束は履行せず、餘計な世話をやく、これ等は皆露西亞流の貴族の惡風であつた。ツルゲーニエフもその例に洩れなかつた。客を招待して置きながら自分は外出して客に留守を食はすこともあつた。小説の原稿に就いても、期限が常に正確でなかつた。ベリンスキイはこれらを指摘しては彼を責めた。後年になつてツルゲーニエフがよく青年の怠慢を責めるやうになつたのはベリンスキイの感化であつた。

斯様にツルゲーニエフを指導したベリンスキイは文學上に於てもツルゲーニエフに感化を及ぼしたことがまた少くなかつた。

千八百三十四年代は、露西亞文壇ではベリンスキイが最も凄まじい活動を演じた時代である。ベリンスキイ時代と稱しても敢て過言ではあるまい。何となればこの時代の文壇は悉くベリンスキイ流の色彩を以て彩られてゐたからである。要するにベリンスキイは露西亞文學思想の柱石である。彼は最近七十年間の露西亞文學に含有せらるゝ一切の眞、善、美の源泉である。けれども彼の直接の感化が最も大きかつたのは彼の生存中であつたのは無論のことである。

ベリンスキイの評論は當時の露國思想界の中心點、露國の智と情との百科全書で、其時代の教育ある人々が關與した總てのものを捉へて鋭敏なる人の精神裡に起つた總ての難問に解答を與へようと努めたものである。彼の論文は理想に憧憬する眞の苦痛を嘗めて得た結果を讀者に向つて傳へんとする燃

ゆるやかな熱心から流れ出たものであるから、常に其評論の根底には當時の神經ともいふべき理想觀念が光つてゐた。これが即ち彼の評論が文學界に新生面を開拓して一派を形成した所以である……彼は露西亞文學の公明正大なる勇士であると同時に、新露西亞の思想界の殉教者であつた……ペリンスキイ時代の露西亞文學史は當時の文壇がペリンスキイの訓言を基礎として創造建設せられたことを語つてゐる。

ツルゲーニエフは斯の大家を親友としてゐたのであるから、その感化も實に大なるものがあつた。ペリンスキイの偉大なる肖像は、ツルゲーニエフの生涯を指導する明星となつて、彼に對して將來辿るべき道を示した。ある人はツルゲーニエフが若しペリンスキイと交はることがなかつたならば、彼の文學上の收獲はしかく大きなものではなかつたらうとさへ言つてゐる。

ツルゲーニエフがペリンスキイを追慕したことは彼の回想記の一節で窺ふことが出来る。

『回顧すればペリンスキイが死んでから早や二十餘年過ぎた。けれども私は彼の貴き面影を思ひ浮べることが出来る。私が私の讀者に向つて特色ある彼の容貌を紹介したのは殆んど幾回であるか知れないが、彼がいつまでも私の胸の奥に残つてゐるのは私の満足に堪えないところである……彼は誠の人であつた！』

ペリンスキイの生前に彼の周圍に集つたものは、多く年少の新進作家であつた。カウエリスイ、ゴンチャロフ、グリゴロウキチ、アンネンコフ、ネクラソフ等の人々であつた。ツルゲーニエフは此等の人々とも交つた。この人達の間では彼は哲學上の博識家として、西歐の文藝科學の精通者として敬

はれた。ツルゲーニェフが此等の人々に及ぼした感化も亦少くなかつた。

ツルゲーニェフの死後、その影響はますます大きくなり、その精神は人々の心に深く刻み込まれた。彼の作品は、その時代の精神を最もよく表現したものであり、その影響は、その後のロシア文学に深く及ぼされた。

九

『獵夫記』時代

ツルゲーニェフは千八百四十三年から四十六年に至る四ケ年間をベテルブルグに過し、其年の末再び伯林へ向つて出發した。此年から千八百五十年に至る數年間は、ツルゲーニェフの生涯中最も光彩ある時期であり、また作家としても最も眼覺ましい活動をした時代である。

詩に、散文に、戯曲に、様々なものを試みて自ら満足することの能きなかつ

た彼は、失望の餘り全く文學的事業を断念しようと思ひ、且つは故國の農奴の状態を目撃するに忍びず、伯林に向つて出發したのである。此時別れに臨んでバナエフに『ホーリとカリヌイチ』と題する一篇を送つて、『ソヴレメンニク』誌に掲載方を頼んだまゝ旅行の途に上つた。バナエフは彼が送つた一篇を餘り價值なきものと見たのであらう、同誌の文藝欄には載せず、雜録欄の片隅に載せて『獵夫記より』と題を變へた。この一篇が世に出ると共に社會の耳目は一齊にこれに向ひ、匿名で發表されたので、讀者は其作者が果して何人であらうかと想像を逞ふして、この作家が農奴に對して深厚なる同情を懷いてゐる事を喧傳した。この一小篇が斯の如く直ちに社會の注目を惹かうとは、ツルゲーニエフの全く意外とする所で、彼はこの意外な成功、豫想外な好評に鼓舞せられて、更にその續篇の著作に従事した。これが集つて一冊と

なつたものが即ち『獵夫記』である。けれどもそれが廣く社會に流布し、作者の文名が隆々としてあがつたのは千八百五十二年單行本として出版された時である。

現今『獵夫記』は二十五篇から成つてゐるが、千八百五十二年に出版されたのは上下二冊で二十二篇を收めてゐる。それは現今の記の中より『チェルトブハーノフの最後』、『叩く！』及び『生ける屍骸』の三篇が抜けてゐるのである。『獵夫記』二十五篇は千八百四十七年から同五十一年までに書いたもので、その大部分は外國生活の間に筆を執つたものである。千八百七十年の頃、サマル縣に大饑饉のあつた時、之に義捐するため各作家が共力して文集を出版したことがある。其時ツルゲーニエフは『生ける遺骸』を送つて恁ういふ手紙を書き添へた。

「別に何といつて用意してゐるものもありませんから、反古の中を探してゐますと、圖らずも『獵夫記』の續篇『生ける屍骸』の一篇が見當りました。これを差上げますから貴兄から宜しく先方へお届けをお願いします。『獵夫記』に公にせられたのは二十二篇ですが、初めは三十篇ばかり用意して居りました。或る篇は到底検閲官の許可を得べき見込がないといふ恐れから、未完の儘放擲つたり、或篇は自分の意に充たない爲め、または事實に合はない所があるので棄てました。『生ける屍骸』もこの部類に屬するものです。かくて『生ける屍骸』は千八百七十六年、右に述べた義捐文集の中で公にせられ、『叩く！』は作者の死後反古の中から發見せられた。『チエルトブハノフの最後』はツルゲーニェフが戀人ウイアルドゝ夫人に佛蘭西語で口述して筆記したもの、親友グリゴロウチが後に露西亞語に翻譯して出版の

際附加えたものである。が、譯文も拙劣な上に、内容も他の諸篇よりは遙かに劣り、且つ餘り關係のないものである。

『獵夫記』二十五篇が果して何の爲めに作られたかといふ問題に對しては、吾人は作者の所謂「年々歳々の誓」を貫徹せんために著はされたものと一言にして答へることが出来る。此の年々歳々の誓、換言すれば農奴權に對する憤怒憎惡の念は、天性藝術家たり思索家たるツルゲーニェフを驅つて經世的藝術家たらしめたのである。彼は激烈なる氣質の人ではない。また社會に於て政治上の地位をも有たなかつた。それでも彼は社會國家の問題と没交渉な文學の波靜かな港灣の中に安閑として止まるに忍びなかつた。是に於て第一期の諸作に自ら慊らなかつた彼は、其筆を一轉して、彼の良心を刺戟し、年々歳々の誓を鼓舞した農奴の一階級に向けた。然しながらこの『獵夫記』に於て、

農奴權に對する劇烈なる攻撃的の筆鋒、地主貴族に對する炎々たる憤怒の情を直接發見することの能きないのは、則ち社會の事情と作者の性質に依るのである。

當時露國に於ける出版物の檢閲は最も嚴重を極めてゐたので、少しでも過激と認められる文字があればどしどし發行を禁止したのである。またツルゲーニエフは専ら溫厚柔和な性質の作家で、過激熱烈は元來彼の特徵ではなかつた。けれども『獵夫記』を讀んだ者は、その中から溢れ出て來る同情のほかに、全篇に浸潤徹底した誠實なる人道の觀念ヒューマニテイが切々と迫つて來て、道義の念を促がし、良心を覺醒して止まないことを知るであらう。

此書が農奴解放運動の覺醒を促すに充分なる効果があつたのは言ふまでもないが、時の皇太子（後に農奴解放令を發布し給ふた皇帝アレキサンドル第

二世）に向つて非常な感化を與へたことは有名な事實である。世間の傳ふる所に依れば、後年アレキサンドル第二世は直接ツルゲーニエフに向つて、『朕は汝の『獵夫記』を一讀したる以來、農奴を解放すべき必要に就いて片時も心を惱まさない事はなかつた。』と仰せられたといふことである。けれどもこれは何かの誤傳かも知れない。佛蘭西のゴンクールは其日記の千八百七十二年の五月二日の條下にツルゲーニエフの直話として、『アレキサンドル皇帝は余の作が陛下の決心の主なる動機の一であつた事を余に傳言すべく命じ給ふた。』といふ様な事を書いてゐる。先の話と相違して居るが後の方が正確らしい。要するにこの書が農奴解放に與つて力のあつたとは言ふまでもない。この點に於て『獵夫記』は米國のストウ夫人の『叔父トムの小舎』が黒奴解放に功があつたのと好一對である。

この書の出版のためにツルゲーニェフが貴族地主から怨みを買つたことは一通りではなかつた。それがあらぬか、彼が千八百五十二年に拘引禁錮（後に詳しく記載す）せらるゝに至つたのも、其原因は此書の出版であると言へ噂された。恰度出版後間もなくモスクワ検閲官リウオフ侯爵は職を免せられた。それはこの書の出版を許した失態に因ると専ら噂された。

スラヴ主義者でツルゲーニェフの親友なるアクサーコフは直ちに一書を作者の許に寄せて、検閲官の寛大に驚いてゐる。

「私は只今『獵夫記』を拜讀して居ります。私は如何にしてリウオフ検閲官が此書の出版を許したか、了解に苦しみます。是れ農奴權に對する正々堂々たる攻撃、いや猛烈な砲火ではありませんか。」

殊に此作を不滅な價值あるものとしたのは、露西亞の大自然が巧妙に描き

出されてゐるからである。作者は自然の力を強く感ずることができ、また自然の魅力を餘す所なく表現し得る技能を具へてゐた。殊にその細微なる觀察力は自然の秘密を穿ち、眼に觸るゝ物、感ずる物——林や野の生活、小河、雜草、曠野の曙、夏の眞晝の森、河上の星の夜——悉くそれらは美しい詩となつて現れてゐる。その藝術的天賦は用語に對し、文句の轉換、文章の配列に對して鋭敏な注意を向けしめた。實にツルゲーニェフの自然描寫は「ブーシキン流の純潔」を備ふると共に又極めて錯雜なる印象をも藝術化しつゝ、自然のあらゆる諸調と色彩とを巧みに捕捉してゐる。だから、露西亞の自然は彼の美しい頁の上に活躍し呼吸して居る。

千八百七十九年、英國牛津大學はこの書が露國社會に貢獻した功を認めて、ツルゲーニェフに Doctor of Common Law の學位を贈つたといふことであ

る。

ツルゲーニェフ自身も此書を餘程重大視してゐたと見えて、千八百八十年自分の全集出版の版權を譲つた時にも、此書の版權ばかりは自ら保留して置いた。それは成る可く廉價に出版して、學生の讀物とし、また學校の教科書として世に普及しようといふ意に外ならなかつた。第五版出版の報を耳にしたのは、彼が逝去數日前の事であつたが、死する二日前に彼は此書の出版が特別なる意味を有つてゐると感じたのか、第五版出版は著者に於て最も満足である旨を書いて送つて呉れと友人に頼んだ。

千八百五十年、獨逸に居つたツルゲーニェフは老母危篤の報知に接して、倉皇として歸國の途に就いた。けれども彼が故郷に着いた時は、もう母は黄泉の客となつてゐた。彼は母と不和を生じた以來一度も母に面會したことが

なかつたのである。

母は死んで二人の息子に廣大な遺産を遺した。兄弟は母の遺産を分配して、茲に初めてツルゲーニェフは大地主となつて、絶対に自由な身體になつた。農奴に向つて滿腔の同情を有し、農奴權に對して「年々歳々の誓」を立てたツルゲーニェフは、今數千の農奴を得て、如何なる處置に出たか、これが則ち吾人が多大の期待を以て研究せんとする問題である。彼は直ちに總ての農奴に自由權を與へ、また勞役義務を免じて耕地を貸與し、借地料を徴收することにした。そこで農奴等は今までは主人の土地を耕作して、收穫は全部主人に收めたが、これからは收穫は全部自己の収益となるので、彼等は始めて獨立の生活を爲すことになつたのである。けれども農奴權に對して學生の誓をしたツルゲーニェフは、必ずや農奴を奴隸的境遇から解放するに違ひなから

うといふのが吾人の期待であつたが、農奴は依然としてその奴隸的境遇から全然脱することが能きなかつた。農奴權の破壊を以て目的とし農奴解放を以て自己の本分と思つてゐた彼が今の處置を見て、或る人は彼は口に唱えて實際に行はざる者と誇り、ツルゲーニエフの人格を云々する人もあるが、それは強ち理由のないことではない。けれども彼が平素の主義に反して俄かに農奴等を奴隸的境遇から解放しなかつたのは、實は農奴の將來と幸福を懸念したからである。思ふに彼は若し農奴等を全然解放して了つたならば、直ちに貪婪飽くことを知らない他の地主富豪の餌となるであらうと察したからであらう。それには一つの前例があつた。千八百四十年代にオガレフといふ詩人にして大地主であつた人が、其所有地の農奴を解放したが、その結果は全く豫期に反して、農奴等は酒に耽溺し、遊惰に流れ、財産を蕩盡し、再び貪婪

なる他の地主の奴隸となつて、却つて以前よりも一層不幸なる境遇に陥つたのである。この事實を知つてゐるツルゲーニエフはその例に鑑みて以上の處置に出たのかも知れない。

彼はスバスコエ村の大地主となつて以來は熱心に農奴の生活状態を改善するに努め、専ら彼等の幸福を圖つてゐたが、農奴で償金を出して身體の自由を望む者には其償金の五分の一を減じ、貧困者には作地を無料で貸してゐた。

また彼は農奴等に、家屋を建築修繕する爲に、材木を與へたが、農奴等は其の莫大な材木を賣却して其金を全部飲酒に費つて了つたことがある。この時は流石温厚なツルゲーニエフも激昂したといふことである。が、是等は異例で、久しく母の下に侮辱を受けた農奴に對して、ツルゲーニエフは之を勞はれるだけ勞つた。農奴の或る者はツルゲーニエフと彼等との關係を語つて

次のやうに言つた。

『私共は彼を「善良な檀那樣」とか「親切な主人様」とか呼んでゐた。(俺達の檀那樣ア歸つてござしやつて、既う獵に行かしやつた、ヂャンカを連れて早朝からのう)といふやうな聲は時々聞かれた。彼は歸省すると私共を招んで、其席上で、(どうだ、お前達は俺の支配に満足か)と訊くことがあつたが私共は(至つて満足でござす、檀那樣)と異口同音に答へた。』
之を見ても如何に彼が農奴の幸福を増進せんと努め、そして農奴等が如何に彼に悦服してゐたか分る。

+

第二期の作物

『獵夫記』を書いた時分をツルゲーニエフの著作の第二期とする。この期の作物には『獵夫記』中の諸篇と四五の短篇がある。今其中に描かれた代表的の性格に就いて研究して見よう。

『ホーリとカリヌイチ』作者は此篇の中で親友の間柄なる二人の農奴

の性格を比較して描いた。ホーリとカリヌイチといふ二人の農奴は全然性質を異にした男であるが、仲は至つて睦じい。ホーリは實際家で理智の人である。カリヌイチは理想家でロマンチストである。従つて前者は多く理智によつて生活し、後者は感情によつて生活する。ホーリは智慧ある農奴のタイプである。彼は經濟的頭腦を有し、自分の利益を察するに巧みで、能く主人の性質を呑み込んで居るから、甘く主人の氣を迎へて行く。そして世才がある爲に生計も豊かに一家維持することができた。けれども概して言へば、彼の性格は普通の農奴に餘り勝つた點がない。彼は矢張り農奴社會に通有な缺點を有してゐる。カリヌイチは之に反し穩かな詩的性格の男である。元來實際的才能がないのと、主人の狩獵のお供ばかりしてゐるので、自分で家政を支持して行くことが能きぬ。二人の性質の相違は彼等が作者と外國の事を問答す

る時の話を見ればよく解る。カリヌイチは山や瀧などの自然に興味を起すけれども、ホーリは外國の制度文物のことばかり尋ねる。そして自分の意見を述べたり、外國人と露西亞人とを比較評論したりする。カリヌイチにはこの批評的才能が缺けてゐる。斯様に正反對な性質にも似ず、二人の友情は炊慕するに足る。ホーリはカリヌイチを愛し、またカリヌイチが種々の禁厭を爲し得る才能を有するのには、ホーリも確かに一步を譲つてゐる。カリヌイチもまたホーリを愛し尊敬してゐる。

『クラシーワヤメーチのカシヤン』カリヌイチと同型な詩的性質を有する代表者は此篇の主人公カシヤンである。カシヤンは他の農奴と一緒に故郷クラシーワヤ・メーチから移住して來た者であるが、如何しても美しい故

郷の天地を忘れることが出来ぬ。彼が自然を愛することはカリヌイチ以上である。彼は自然界を研究して薬草を集めて人の病を治す。彼は自分の空想の天地に住しつゝ、太陽が麗らかに照り輝き、安樂に生活ができて、鳥が其靈妙な音楽で人を悦ばす遙か遠い國へ行きたいと憧れてゐる。彼は自然界のあらゆるものに優しい愛情を有し、血を流すとは罪惡で、また恐ろしいことであると固く信じて、『血は神聖なものである—お日様も血は御覽なさらぬ。血は光から隠れるものである。』と言つてゐる。彼は鳥獸を殺して血を出すのを罪惡と信じてゐるから、作者が獵に行つて水鶏を殺すのを盛んに叱る。作者が『お前も鳴や鶏を食ふではないか。』と詰ると、彼は是等の鳥は人間の食物とする爲に神様がお造りなされた物であるから食つても差支ない。然し水鶏は自由山野を翔る野鳥であるから殺しては不可ない。人間の食物はちやんと別

に與へられてゐると答へる。然るに彼は鶯の歌が好きであるから、自分で鶯を捕へる。そして慰みに其れを人に與る、殺すのではない。彼は自己獨特の言葉を使つて喋言る。で、彼の會話は一種の色彩を帯びてゐる。又彼は歌を歌ふことが上手である。恐らくカシヤンはツルゲーニェフが農奴の中から選んだ最も力あるアイデアリストであり、また詩人である。

『ピリユーク』 ピリユークは善良なる農民のタイプである。彼は二人の娘と共に見すばらしい小舎に住まつてゐる。彼の妻はある町人と出奔した。彼は正直一點張の男で、山番を勤めてゐる。『薪一杷人には盜ませぬ—錢を見せても酒を見させても彼奴を欺す譯には行かぬ。』と人々は言つてゐる。彼は濫い顔をして無口である。作者がそれを訊くと、『自分の職務を正しく行ふの

です。徒らに主人の飯を食つてはなりません。」と嚴格に答へる。顔は恐いが、彼は非常に同情深くまた善良な男である。いつも林の材木を盗みに來る農夫等を捕へて、たゞ引張つて來るばかりで、後には彼等を憐んで返してやる。作者は丁度かういふ時に遭遇つた。ピリュークは材木を盗みに來た男を連れて來た。が盗みをするやうな者は貧に迫られて悪いとは知りながら餘儀なくするのだと言つて、其百姓を許してやつた。けれども彼の顔には少しも善い事をしたといふやうな色が見えぬ。却つて作者が其處に居合したのを見て、さも極り惡げに思つてゐる。

『生ける屍骸』 ツルゲーニェフは此篇で農奴の中にも斯の如き高潔な精神を有つてゐる者があることを吾等に示した。此篇の主人公はルケリヤとい

ふ年若い少女である。ルケリヤは美しい娘で、其性質は快活であつた。彼女は若い夫を愛し、また愛せられてゐた。けれども或日の事、彼女は誤つて階段から轉げ落ちたが、其が原因となつて、一種の病氣になつて、身體が衰弱し、足が萎へて、後には全く足が立たなくなつて了つた。作者はルケリヤが小さい小舎の中に起臥して居るのに會つた。小舎の側には蜜蜂の巢がある。彼女はいつでも夏をこの小舎の中で送るのであつた。彼女は病氣の爲めに非常な苦しみを堪えながら、現在の境遇にも落膽せず、歌を謠つたり、自然界の様々な現象を眺めたり、菩提樹や蕎麥の花に見惚れたり、蜜蜂が巢を出たり入つたりするのや、燕が巢を作る有様に見入つたりして居る。

作者が彼女に向つて、彼女の忍耐は感服に堪えないといふと、彼女はジャン・ダークの忍耐に較べれば自分などは論ずるに足らぬと言つて、ジャン・ダ

トクの傳記を語り聞かせる。ルケリヤは信仰の強い女で、豫言若や基督の姿を見る。時には自分の死んだ夢までも見る。そして死んだ夢を見ても決して恐れない。彼女が死を待つのは喜びを待つ様なものである。作者が「何か不自由な事があるなら助けてやらう。」と言ふと、「何も要りませぬ、お蔭で何事も満足でムいます……だけど、旦那様、一つお願いがムいます、何卒あなたのお母様にお勧めして下さい……此處等の百姓は貧乏ですから年貢を少し減らして下さい。私には何にも要りません、何事も満足でムいます。」とルケリヤは答へた。

『歌手』 唯ある田舎の薄暗い酒店で、歌手の競争が始まつた。聴衆の中には作者も混つてゐた。歌手の中に、一人の商家の手代があつた。快活な勇ま

しい若者で、自分こそこの競争では第一番であると信じてゐる。彼は勇ましい活潑な歌を唱ひ出した。聴衆は皆その力強い高い肉聲、其巧みな節廻しに酔はされた。彼の歌は深い感銘を聴衆に與へた。次には病人らしい弱々しいヤコフといふ若者が出た。彼は悲調を帯びた、聴衆の胸に悲しみを送るやうな民謡を歌ひ出した。初めの内は落付き兼ねた音聲も次第に整つて来て、歌は口を衝いて流れ出た。歌手も自分の歌に酔つてゐる。その歌には露西亞の強い畑、河、林、平原などの大自然を貫いた、また國民性の一特徴として現はれて居る太古からの詩的哀調が流れてゐた。「この歌からは或る親しい、廣い、茫漠としたものが響いて来る。恰かも見馴れた荒原が聴衆の眼前に現はれて、無限の遠くへ隠れ去るやうに、人々の胸の奥深く喰ひ入つた。」彼等の眼には涙が溢れた。唱ひ終ると、聴衆の歡喜は忽ち爆發した。皆相寄つて歌手を抱

擁し、接吻し、涙を流して感謝した。無智昧で何等の権利さへも認められぬ農奴の間にも尙ほ藝術的の高潮した力と光明とがあつた。

『ページンの草場』 ツルゲーニフは農奴の少年のタイプを此篇で描いてゐる。煌々と輝く星夜の空を背景として、百姓の子供等が草場へ来て野宿する所を描いてゐる。子供等は眠りに就く前、焚火してその周圍に寄り集つて夜の闇黒い静寂の中で、恐怖と不安の心持に襲はれて、互ひに幽霊の事や死のお迎への事、又は妖怪のことなどを語り合つてゐる。此等の話は皆曖昧な農民社會に傳はる迷信の反映に外ならぬ。少年中パウルーシヤは思慮と果斷との性質を具へた少年である。この少年は不可思議な昔噺や迷信を批評的に考へ、またその自然的説明を發見しようと努め、危険の迫つた瞬間に

もそれを平然として迎へることを練習してゐる。これに反してイリユシヤは病的な空想的な少年である。彼は優柔で臆病で、全然迷信や昔噺の中に囚はれ、空想の世界に住んでゐる。この二人の者の中間に幼いコースチャといふ子供がその聞き覚えの話を語りながら口稗の詩的方面を仄めかしてゐる。これには無意識の詩を感せしめられる。

以上の數篇は其他の諸篇と共に『獵夫記』中に收められてゐるが、同じく第二期に屬すべき作物には此外に數種の喜劇と、小説『ムムー』及び『旅人宿』の二篇がある。兩篇とも横暴なる地主の權下に虐待せらるゝ農奴の哀れな運命を描いたもので、其性質上當然『獵夫記』の續篇と見做すべき作である。

禁錮

吾人はツルゲーニエフの一生中で最も重大な意義を有し、且つ文學的にも全盛を極めた千八百五十年代の敘述に入る前に、彼が不圖したことから禁錮せられる事になつた事件を記述する必要がある。

千八百五十二年、文豪ゴーゴリが死んだ。三年の禁錮事件の原因は則ちこれである。ツルゲーニエフが初めてゴーゴリを見たのは、千八百三十五年

テルブルグ大學に在學中のことである。當時ゴーゴリは同大學の歴史の講座を擔任してゐた。ツルゲーニエフはゴーゴリの講義振に就いて恚う言つてゐる。

『ゴーゴリの教授振は、實を言へば頗る奇抜なものであつた。彼は三時間の授業時間の中、必ず二時間は缺勤してゐた。彼が講壇に現はれた時は、聲を出して言ふのではなく、非常に不明瞭な聲で何事かを叫やくのである。そしてパレスチナや東邦諸國の圖を現はした小さな鐵板を示しながら、斷えずキョト／＼してゐた。學生は彼が歴史に就いて何事も知らないのであると思つてゐた。彼は教師としての自己が頗る滑稽で且つ面白からぬ事を悟つたのか、千八百三十五年には遂々辭職した。』

これから十五年を過ぎた千八百五十一年にツルゲーニエフはゴーゴリを訪

問した。

「余をゴーゴリの家に連れて行つたのは死んだシチエブキンであつたが、余は別に面會する用事もなかつた。たゞ一度でもいゝから面會したいといふ希望は以前から強かつた。余は彼の著作の全部を殆ど暗誦する位に覚えてゐた。當時のゴーゴリの名聲が如何に偉大なものであつたかは、今から到底想像も能きない。」

ゴーゴリも亦若き作家ツルゲーニェフを愛してゐたのである。「現今讀むに堪ふる作家は僅かにツルゲーニェフ一人である。」とさへ言つてゐた。

然るに千八百五十二年二月、露國新文學の鼻祖と仰がれたゴーゴリは忽然として世を去つた。その死を聞いて哀傷に堪えなかつたツルゲーニェフは一篇の論文を書いた。其文の中で彼はゴーゴリを露國の大なる光榮とし、彼を

大文豪と激稱し、此の文豪の逝去に對して露國の社會が冷淡な事を憤慨した。ペテルブルグの検閲官は此論文を印刷に付することを禁じたが、モスクワの検閲官がそれを許可したので、千八百五十二年の四月、モスクワ市で發行する『モスコーフスキヤ・ウエドモズチ』紙上で發表された。所が、意外にも彼はその月の十六日、官憲のために拘引される事になつた。最初一ヶ月間は警察署に置かれ、それから故郷スバスコエ村の自宅へ送られて、其處で三年間の禁錮を受けることになつた。一旦許可したものに就いて検閲法違反として拘引するのは誠に意外のことであるが、多くの史家はゴーゴリ論は表面上禁錮の原因となつてゐるが、眞の原因は農奴權に大打撃を加へた『獵夫記』の出版であると言つてゐる。けれどもそれは穿ち過ぎた誤つた論斷である。何となれば、ツルゲーニェフの拘引せられたのは四月十六日であるが、彼はその年

の六月六日の日附で、禁錮地から友人アクサーコフへ宛て、次のやうな書を送つてゐる。

『小生の「獵夫記」の單行出版の準備は既に終りを告げ、出版許可證も下附相成候。』然し小生はケツチエル君と相談の上今暫らく出版の時期を見合す事に決定仕候。』（ツルゲーニエフはこの書の出版の収益を當時困窮してゐた友人ケツチエルに與へようとしてゐた。）

此書狀で、拘引の眞因は「獵夫記」の出版でないことが分るであらう。彼自ら言ふ如く拘引の原因はゴゴリ論に基くといふことを信じなければならぬ。けれども吾人は三年の禁錮が單に一小論文に依つて宣告せられたとは斷定しない。他に官憲を刺戟した様々な原因があつたのである。當時農奴解放論者を蛇蝎の如く嫌つてゐた露國官憲は「獵夫記」の精神が果して那邊にある

かをは、察することが出来たので、其作者の舉動に大に注意を拂つた。自由思想家ベリンスキイとの交友、屢々外國に旅行した事、彼が猛烈な西歐主義者である事などは皆此論文を機會として拘引を誘致した原因である。

この論文が拘引の原因となつたものとすれば、其の文中如何なる點が官憲の忌諱に觸れたかと言ふに、それはたゞゴゴリを名譽ある大文豪であると稱揚したことであつた。

當時ツルゲーニエフが如何にゴゴリを崇拜してゐたかは、ゴロワチエフ女史の語る所で分る。

『其頃は官憲の注意が嚴重で、文學者に向つて特別な尊敬を表することを嚴禁してゐた。あの論文が禁止された時、ツルゲーニエフは失望落膽して、それをモスクワへ送らうとバナエフ氏に語つた。バナエフ氏は其論文は掲

載しない方が得策であると忠告した。何となれば其筋ではツルゲーニェフがゴーゴリ逝去の爲に喪章を纏つてさへ注意してゐたからである。それに加へて彼は上流社會の知人を歴訪して、ゴーゴリの如き大文豪の死に際してペテルブルグ市民が冷淡な態度を取つてゐるのを思ふさま攻撃し、且つ其論文を到る處に持ち歩いて朗讀してゐた。此の論文は検閱官のために赤インキで抹殺されてあつた。バナエフ氏はツルゲーニェフに謹慎しなければならぬと勸告したが、彼は「ゴーゴリの爲とならば牢獄に投せらるゝも敢て厭はない」と答へた。」

斯くてツルゲーニェフは拘引の身となつて、規則に従ひ一箇月間を警察署の留置場に送ることゝなつた。此時モスクワ警察署長には二人の令嬢があつたが、ツルゲーニェフが拘引せられたと聞いて、日頃「獵夫記」の愛讀者であつ

た二人はその作者と相識るの機會が來たのを喜んで、父なる署長を説いて自宅にツルゲーニェフを留置することにした。ツルゲーニェフは二人の令嬢の庇護に依つて面白い汚ならしい留置場の憂目を見ることを免れて、一ヶ月を署長の家で安樂に暮した。

其處に居る間に彼は有名なる小説「ムムー」を書いた。此小説はカーライルをして小説界近來の最大快著であると叫ばしめたほどで、農奴權に對して痛快な筆を向けたものであつたから、検閱官の許可を得ることが出來ず、二年を過ぎて漸やく千八百五十四年に公にした。彼が小犬ムムーを叙するあたりの暖かい同情の籠つた筆は讀者を泣かした。それが爲めツルゲーニェフの葬儀には露國の動物虐待防止會は特に會の代表者を遣はして參列せしめたくらゐである。

警察署長の宅で成規の通り一箇月間を送つた後、ツルゲーニエフはその年の五月憲兵が附添つて故郷スバスコエ村の自宅へ護送せられ、此處で自宅禁錮の執行を受ける事になつた。その禁錮の月日は彼に多大の利益を齎らした。彼はその間に露國民の生活状態の一面を観察することが出来た。そしてその一面は身に何事もない平生の滞在では必ず注意を逸したことであつたらう。彼は禁錮の間にもペテルブルグへ出る事を許されてゐた。たゞ彼が受けた打撃は海外の旅行が出来ないといふ事だけであつた。

禁錮中の彼は熱心に著作に従事し、また銃を肩にして森林沼澤を跋渉して一日も安閑としてゐる日はなかつた。クリゴローウキチ、ポーツキン、ドウルジイニンなどいふ友人は絶えず彼を訪問して來た。彼がボロンスキイに送つた手紙に次のやうなのがある。

『小生の宅にはグリゴローウキチ、ポーツキン、ドウルジイニンの諸君が泊りに來てゐます。私達は手造りの頗る振つた舞臺の上で狂言芝居を演じたりして愉快に遊んでゐます。閑靜な時は著作に耽るのです。恐ろしい大旱魃のために已むを得ず薄暗い室内に籠り勝ちで、屋外の労働は全く不可能となつて、萬事に障害を被つてゐましたが、幸ひに只今雨が降り出して來ました。若しこの雨がなければ穀物が皆枯れて了ふ所でした。』

この書信を讀んで見ると、ツルゲーニエフが農作物を心配してゐるのは誠に殊勝氣であるが、彼は決して家事を顧みたり農作を慮つたりするやうな人間ではなかつた。彼は時々『余は露國貴族中の最も無秩序者である。』と言つた程で、廣大なる土地の管理等は一切他人に放任して顧みなかつた。斯様に家政には至つて無頓着な放任主義であつたから、所有地の管理を委託され

た支配人の中には、随分不正な私利を圖つた者もあつた。

『小生は遂にかの支配人を放逐致し候。彼は小生の財産より五萬二千留餘を着腹致候。五萬二千留と申せば小生の財産の可なり大部分に候。何故小生は斯る愚なる始末に及び候ひし哉。彼の毛濃き嫌らしき顔を眺めては、其人相が詐欺者の部類に屬するものなることは、小生も疾くに感付き居り候へども、遂に彼を盲目的に信用致し候こと全く小生の無精より出でたる結果に御座候。』

彼が或る人に送つた手紙にこんなのがあつた。

ツルゲーニェフは毎年二萬留以上の収入があつたが、常に金に困つて借財してゐた。それは露西亞貴族に通有な豪放の結果で、此惡風があつた爲に彼は生前様々な不評判を受けたのである。彼の著作上の収入も亦多額に上つた。

雑誌『ソヴレメンニク』の株主として莫大な利益配當があり、『獵夫記』の單行本でも年々二千五百留の純益を得た。また彼の全集の版權は二萬五千留で買された。

ツルゲーニェフが故郷に禁錮せられて居る時分、ある農奴の女と關係して、一人の女の兒が生れたといふ事實があるが、それは世間へあまり知れない事實で、その真相は極めて漠然としてゐる。彼はその女の兒を貴族風に教育したが、彼は常にこの兒の事を苦に病んでゐた。その兒の運命はどうなつたかは解らないが、それに關するツルゲーニェフの書簡が二通發見された。

『小生は矢の如く巴里に向つて疾走し、それより伊太利のチューレン市に滞在せる小生の娘の許へ赴く豫定に候。娘は目下臨月にて候へば、小生が祖父となるも近き將來に可有之候。』(千八百七十二年六月二十六日附モスク

ワ市より佛蘭西の友へ宛てたる書簡。

『小生は七月十三日より祖父と相成申候。小生の娘は女兒を分娩仕り候。女兒の名はジャンヌと命名致し候。八月の末つ方小生は孫に洗禮を受けさすべく彼地へ發足致す筈に候。』(千八百七十二年七月十三日附同上。)

千八百五十四年の末、ツルゲーニェフは期限前に放免せられたので、直ぐにペテルブルグへ出て、やがて外國へ去つた。彼が期に先つて許されたのは偏へに、~~アレキサンダー~~・トルストイ伯及びスミルノフ夫人が時の皇太子、後のアレキサンドル第二世に嘆願して放免の運動をした結果であつた。

自宅禁錮中の作としては、『二人の友』、『静寂』、『旅人宿』等で、其他『ソルレントの一夜』と題する喜劇及び二つの論文を書いた。『旅人宿』は『ムムー』と同一の性質を帯びた小説であつたから、當時は出版を嚴禁されたが、越えて

カシヤセイは
伯にあつた
アレキサンダー
トルストイ伯
及びスミルノフ
夫人が時の皇太子
後のアレキサン
ドル第二世に
嘆願して放免の
運動をした結果
であつた。

千八百五十六年アレキサンドル第二世の代となつて世に現れた。

全盛時代

十九世紀の露西亞歴史には十年目毎に社會思潮の上に變動を生じて、所謂時代精神若くは傾向といふものが大きな波を打つた。千八百三十年代の露西亞はバイロンを崇拜し心酔した時代であつて、ロシヤのバイロンと言はるゝ詩人レールモントフを出したのも此の時代の事である。千八百四十年代の時代精神の代表者は民情派と理想派であつて、此の時代精神の權化ともいふべ

き代表的人物は批評家ベリンスキイであつた。彼はヘーゲルに心酔し、藝術の獨立的意義を承認すると同時に、理想家レルーや農民小説家サンドなどの著書を愛讀して、露國農民に對する同情を起した。

千八百五十年代は享樂派と唯美派との時代であつて、ゲーテとブーシキンとが崇拜せられ、藝術の爲の藝術主義を宣傳し、其精神に於ては樂天主義であつた。千八百六十年代は労働者や事業家の活動時代であつて、また嚴肅派リゴリストの時代であつた。

ツルゲーニエフはヨリ多く唯美派、享樂派の人々に接した。此等の人々は一事一物に執着することがなく、西歐の教育を受けた樂天主義者で、實際生活や實社會の活動に最も懸け離れた抽象的理論を好み、社會問題に關しては全く無頓着であつた。

ツルゲーニェフと千八百五十年代の唯美派とは骨肉的、精神的若くは有機的關係があつた。彼はプーシキンを崇拜し、藝術のための藝術主義に傾いたが、元來彼は四十年代の思潮に感化せられた人であつたから、五十年代の人のやうに全然社會的活動に冷淡で、國家的問題に對して無頓着である事が出来なかつた。ベリンスキイの感化は彼の心の中に深く浸み込んで、彼の社會的活動及び國家的問題に對する無頓着な態度を或る程度までは抑制してゐたので、之が爲に彼は五十年代の大氣中に浮遊しながらも尙ほ進歩論者たることが出来た。

ツルゲーニェフが友人ネクラソフの詩を評した所から見れば、彼が藝術の爲めの藝術主義を奉じてゐたことに氣が附く。

「ネクラソフ君、僕等が今自分の意見を吐露するのは、君の利益を思ふ一念

から出ることを君は認めて呉れるだらう。」とツルゲーニェフが言ふと、

「君等は僕が立腹するとも思ふのか？」とネクラソフは歩きながら言つた。

「別に立腹する理由はない。評せられた者は宜しく評者に向つて感謝すべきだ！ネクラソフ君、君の詩には典雅な形式がない。それは詩人として大缺點である。」と傍からプーシキンが口を挟んだ。

「君の詩は寫實主義に力を入れ過ぎた」とツルゲーニェフが注意した。

「さうだ、それが不可なのだ。寫實も程がある。それは藝術眼の發達した人々を徒らに擧げせしめるに過ぎない。詩も音樂も同じく不調和は耳を斬るものだ。友よ、詩の本領は形式と題目の典雅であつて、君の如き寫實主義ではない。」とプーシキンが言ふ。

「僕は昨夜プーシキン君と一緒に或る詩的眼光を有つてゐる貴婦人の家に行

つたが、その貴婦人はゲーテ、シルレル、バイロン等の詩を原書で読んでゐる人だ。僕は君の詩を紹介しようと思つて読み聞かせた。すると彼女は非常な注意を以て聞いてゐたが、読み終ると、彼女は如何言つたらう。(あゝそれは詩ではない。その作者は詩人ではない)と叫んだのだ。」とツルゲーニェフが言ふ。

「僕の詩が上流社會の婦人に喜ばれない事は僕もちやんと承知してゐる。」とネクラソフが言つたので、ツルゲーニェフは激昂しながら叫んだ。

「そりや、駄目だ。貴婦人の意見に對して、そんなに高く濟まし込むのは宜しくない。プーシキンでもレールモンツフでも、皆貴婦人の意向を窺つて、世に公にする前に必ず彼等に讀んで聞かせたぢやないか。」

「僕はプーシキン、レールモンツフとは遙かに離れて居るのだ。若し僕が彼

等を模倣したら全く價值のないものとなる。作家には獨創力オリジナリチが必要なのだ。僕の獨創力は寫實だ。美學的見地から言へば、君等の言ふことが正當かも知れないが、君等は大事なことを忘れてゐる。作家は深刻に心に感じたことを筆に傳ふるものだといふ事を忘れてゐる。僕は少年時代から、露國農民が餓、寒氣、其他様々な暴虐の爲に塗炭の苦を受けてゐるのを見て深く感じた。そして作詩の動機を彼等農民社會から得て來たのだ。」とネクラソフは辯駁した。

ツルゲーニェフとポーツキンの見解は千八百五十年代の唯美的思潮を遺憾なく披瀝したものだ。かくの如き偏見を抱いてゐたツルゲーニェフを公正なる作家にしたのは、ベリンスキイの感化と西歐の文化とに外ならなかつた。

前に述べた如く、ツルゲーニェフは、千八百五十五年禁錮を解かれると、

直ぐに外國に向つて走つた。そしてそれ以後の彼の後半生は殆んど獨佛兩國で送られることになつた。たゞ毎年夏には歸國して故郷スバスコエ村の自然に親しんだ。外國の生活は彼に故郷を懷ふの情を切ならしめた。外國で筆にするもの、心に考ふるもの凡て故國といふ觀念を全く離れてすることができなかつた。巴里から故國の親友に送つた手紙の一節には、よくその間の消息を語つてゐる。

『佛蘭西滞在のため小生が其影響を蒙ることは日常事の如く相成申候。聞くもの見るもの總て小生を益々近く益々密接に露西亞の方へ壓迫して止まず候。總て親族的のものは小生に取りて二倍も可懐しく相成申候。』

農奴解放に影響された千八百六十年代の急激なる社會思潮の變遷に連れて

推移するとは、彼には全然不可能であつた。國家的問題に冷淡にして實社會に迂遠な空論家が純藝術に憧憬した時代は、千八百五十年代の前半期に於ける暫らくの間の傾向で、その傾向は千八百五十四年に起つたクリミヤ戰爭に依つて急轉直下の勢ひで一變した。そして彼等に代つて露國の社會に現はれたものは露西亞文學史家の所謂六十年代派と稱する新時代の人々であつた。クリミヤ戰爭の結果は如何であつたか、古來富國強兵を以て自らも信じ列強も許して居た露西亞帝國は、其實財政に於ても武力に於ても貧弱であつたことを曝露し、數字の上では充分に準備が整つてゐたが、一度戰端を開くと脆くも聯合軍のために敗られて了つたのである。

この戰爭の敗北は露西亞國民に大きな刺戟を與へ、露西亞は積年の迷夢を破つて新生活に向つて覺醒し、社會では新精神が勃興し、文壇では新しい詩

歌が生れた。

その時巴里に住んでゐたツルゲーニェフは、露西亞から送つて来る各種の新聞や雑誌を讀んで、洩れなくその論說記事に眼を通して、故國の思潮の變動、社會の出來事に注意を怠らなかつた。彼が年來の願ひであつた農奴解放が着々として準備せられつゝあつた時であるから、彼は故國に勃興した新氣運に對しては滿腔の同情を寄せ、また社會の新傾向を了解する事が出來た。

新たに露國の社會に現れて來たものは勞働的人物であつた、事業家的人物であつた。實際社會の活問題に従事して、新社會新時代を建設することに努力奮闘した活動的人物であつた。彼等は美術文藝に對しては全然門外漢ではないが、比較的それ等に對しては冷淡であつた。ツルゲーニェフはこの新氣運に向つては意に充たない多くを發見したが、然しこの時代精神をよく了解

し、それに遅れざらんと努めた。然らば享樂派であり、また貴族の子弟であつたツルゲーニェフはこの新時代に對して如何なる態度を執つたか。彼が千八百五十年代の唯美主義を代表する批評家ドウルジイニンに與へて、六十年代の勞働的氣運、藝術に冷淡なる新氣運を代表するチエルヌイセーフスキイの所論を批評した手紙に次のやうな一節がある。

『實はチエルヌイセーフスキイ氏の爲めに氏の評論の乾燥無味な事を悲しむと同時に、現存の人に對する彼の無遠慮極まる態度に憤然たらざるを得ない。けれども彼には腐肉がない。反つて彼には生ける潮流のあるのを感ずる。假令それは吾人が批評家にあれかしと希望するが如き潮流ではないが、彼は殆ど詩を解し得ない。其代り彼は現代實生活の要求を解してゐる。それが則ち彼の存在の根本になつてゐるのだ。』

チャエルヌイセーフスキイは有名な批評家で、當時の進歩主義の旗頭であつた。此の書簡でツルゲーニエフがこの新氣運に對する見解を察することが出来る。

吾人は之から千八百五十年代に於ける彼の文學的事業を叙述する筈であるが、暫らく彼とトルストイ伯との關係に就て語る必要を認める。

トウーラ縣のヤスナヤ・ボリヤナのトルストイ伯の居室には、今猶ほその壁間に大きな額の懸つてゐるのを見るだらう。その額は千八百五十六年ペテルブルグで撮影した寫真で、其中に現れてゐる人々はグリゴロウキチ、ゴンチャロフ、ツルゲーニエフ、オストロフスキイであるが、その中に軍服を着けて異彩を放つてゐるのがトルストイ伯である。

千八百五十五年の末、クリミヤ戰役が終りを告げると、當年二十七歳であ

つた伯は、セバストーポルの勇士として、また『セバストーポル物語』の著者として、ペテルブルグへ出て来て上記の青年作家と交際をしたのである。けれども、これ等の作家は互ひに親しくすることが出来なかつた。ツルゲーニエフとゴンチャロフとは間もなく不和を生じ、千八百六十四年には伯とツルゲーニエフとは些細な事から武器を取て相向はんとした。當時ツルゲーニエフは伯と同じ下宿に住んでゐたが、全く其性格を異にしてゐたので、遂々互に理解することが出来なかつた。

グリゴロウキチは其回想記の中で、雑誌『ソヴレメンニク』同人の午餐會の様様を書いて恚う言つてゐる。

『午餐會に於ける出來事は當時トルストイが凡てのものに對して有つてゐた不満の爆發であるとも言はれやうが、恐らくは彼が反對好の性癖に依る

ものと言つた方が更に適切であらう。一體彼は議論をする相手の意見如何に拘らず、相手の權威が大なれば大なる程、猶ほ反對の位置に頑張つて、何所までも盛んに抗辯するのが癖である。彼が相手の言葉に凝つと聴き入つて言葉尻を一々吟味して居るやうな様子や、人を馬鹿にしたやうに口を尖らしてゐる所は、何う見ても、如何にして問に答へようかと考へて居るのではなくて、對手を驚かし困らすべき意見を表白するには何うしたものかと苦心して居るやうだ。斯ういふのが青年時代に於けるトルストイの私に與へた印象だ。議論の際、彼は常に論鋒を極端まで走らした。一度私は彼とツルゲーニエフとが議論して居る室の次の間に居合したとがあつた。二人の恐ろしく、大きな聲を聞いて、其室に入つて見るとツルゲーニエフは酷く激昂した様子で室の中を歩き廻つてゐたが、私が扉を開けたのを機

に急いで室を出て了つた。トルストイは安樂椅子に横になつて居たが、彼の激昂も亦却々大したもので、私は辛つとの事で宥めて家に歸してやつた。一體此時彼等は何を論じてゐたか、それは今に解らぬ。』

ツルゲーニエフは學問萬能主義の人であつた。トルストイは宗教を重ずる人であつた。『學問は人生の光なり、自由なり。』といふのがツルゲーニエフの信条で、彼は智識に由つて人生を究めんとして失敗した人である。『學問は人生の指導者にあらず』とはトルストイの信仰であつて、彼は宗教に由つて、人生の意義を發見した人で、學問は徒らに人を誤るものであるといふのが其意見であつた。二人は全然性格を異にした。けれども二人の友情は決して紙の如きものではなかつた。千八百六十九年トルストイの『戦争と平和』が完結した時、ツルゲーニエフは此作を以て、『創作力と詩的才能とを以てしては千八

百四十年以來我が露西亞文壇に現はれたる總ての作の第一位に推すべき傑作である。』と稱讚した。

當時の露國の社會は、クリミヤ半島の風雲に心を奪はれ、他を顧る暇なく、文學美術は全く注意の圏外にあつたけれども、ツルゲーニエフの著作のみは常に文壇に盛なる反響を與へ、熱烈なる論戰爭闘を惹起し、彼の文名は隆々たる勢を示したのである。殊に騒然たる反響を起したのは千八百五十五年に出た『ルーデン』であつて、『ルーデン』といふ名前は間もなく、ブーシキンの『オネーギン』、レールモンツフの『ベチョーリン』の如くに、同じ型の人物性格を總稱する普通名詞のやうに人々の間に使用された。ルーデンの性格には作者自身の面影を偲ばしめるやうな點が多かつた。その貴族的性質、虛榮心、

理想主義、厭世的傾向、卓絶せる智力、薄弱なる意志、それ等は皆ツルゲーニエフと離して考へることの出来ないものであつた。更に兩者の著しい類似はその放浪生活であつた。

批評家はルーデンの性格を見て驚嘆した。そして直ぐにそれを了解し評價する事が出来なかつた。批評家が自分の小説に對して與へる侮辱的な批評、不公平な言説を見て、外國に住んでゐるツルゲーニエフが不満を抱き、悲哀を感じたのは無理ならぬ事である。彼が斷然文壇を退かうと思ひ立つたのは決して一度や二度ではなかつた。けれどもそれは彼が文壇の批評に失望落膽の餘り口外する例の病的懷疑に過ぎなかつた。一體ツルゲーニエフは小膽にして神経質の人であつたから、些細の事にも氣を揉み、殊に自分の著作の批評には神経を惱ましたのである。千八百五十七年に彼が友人ボーツキンに與へ

た手紙で、矢張りそんな事を言つてゐる。

『愚なる哉、小生には完全なる才能無之候。詩的琴線は有之候へども、既に鳴盡して再び鳴らんとも致さず候。今は只退隱あるのみに候。是れ口惜紛れの言葉にては無之、徐ろに成熟したる信念の表白若くは結果なる事を斷言仕り候。今日までの小生の作が何れも不成功なるを見ては、何分將來の見込無之候。夫故に小生はこれより「ドン・キホーテ」の翻譯に従事致す筈に候。』

この決心は彼が平素の憂鬱の發作に過ぎなかつたが、彼の才能が全盛に達せんとする時に當つて、彼の心に一種の道德的變調を起したとは事實である。此の傾向は既に『ルーヂン』と同年に出了た『ファウスト』にも現はれ、『森林の旅』にも、『アーシャ』にも、皆一種の哀調を以て現はれた。この『アーシャ』に

對する批評でも、また彼は懷疑に陥つたが、チエルヌイセーフスキイの同情ある批評があつた、ゆゑに漸く安堵することが出來た。

千八百五十八年を以て長篇小説『貴族の家』が世に現れた。此小説は最も社會の賞讚好評を博したものであつて、作者自身も其生涯中此作程成功したものはないと自認してゐた。彼は總じて露西亞の自然を描くに妙を極めたが、此作に於ける如く彼れ獨特の自然描寫が圓滿に發揮せられ、また作中の人物が活躍したものはなかつた。

千八百五十八年、暫らく彼は故國に歸つてゐたが、長く留つてはゐなかつた。此頃からツルゲーニエフが年來の理想とした宿望が次第に實現せられて、今や西歐風の作家となり、彼の作は續々として歐洲各國の語に翻譯せられて、全歐の愛讀好評を受けることになつた。

或る日彼はネクラツフと次のやうな話をしたことがあつた。その頃ツルゲーニエフは同時代の文學者中では最も外國文學通であつて、外國の天才の作物を總て原書で読んでゐたのである。

『露國は歐洲の文明に遅れた。果して我が露國にはダンテ、セクスピアの如き大文豪が生れるだらうか。』とツルゲーニエフは言つた。

『ツルゲーニエフ君、神は吾等を辱しめなかつた。ゴーゴリこそ露西亞のセオスピアではないか。』とネクラツフが答へると、ツルゲーニエフは微笑しながら言つた。

『君は少し飲み過ぎしてはゐないか。兩者の相違は雲泥も雷ならぬことを想像し給へ。セクスピアは既に幾世紀も全世界の文明國民に愛讀せられ、そして將來も尙ほ無限に愛讀せられるだらう。彼は世界的作家だ。けれどもゴ

ーゴリを読むものは露西亞人ばかりだ。それとても數千人の讀者に過ぎない。そして歐羅巴は彼の存在さへ忘れて了ふだらう。露國の作家は總じて悲しむべきものだ。彼等は社會から棄てられた人のやうだ。其生存は慙れむべきもので、夢の間のやうだ。實に慨歎に堪えない。佛蘭西のジューマの如きも今全歐の國民に愛讀され翻譯されてゐる。』

『歐洲に於ける名聲などは僕の關する所ではない。若し露國人さへ自分を讀んで呉れれば、自分はそれで満足だ。』

『君は露國の作家が受くべき屈辱や打撃を感じないのか、僕は了解に苦しむ。僕等はたゞ少數の露西亞人のために筆を執るのではない。君がそれを感じないのは外國の作家が文明國で社會上如何なる地位を占めて居るかを知らないからだ。彼等は教育ある社會の先驅者とせられてゐる。然るに僕等は如何

だ。一種の賤民ではないか。自己の感想も感情も思ふ儘に表白する事が出来ない。動もすれば牢獄へも投せられるのだ。著作物の運命は十枚の褌袍を纏ふ汗臭い土人(検閲官を指す)の掌中にあるのだ。彼等土人は悪臭紛々たる汗を嗅ぎ慣れてゐるから、少しでも新鮮な香が鼻を打てば、直ぐに怒つて、猛獸のやうに其作物を寸断するのだ。僕は總ての印刷機を破壊し、總ての製紙會社を焼拂つて、筆を手にするものは悉く刑殺して了つた方が合理的だと思ふ。僕は親の財産を相続して直ぐに外國へ行つて了つた。僕は露國に居るに堪えないのだ。』

『君は始終外國に住んで居るから、さう思ふのだらう。けれども僕等にインスピレーションを興へるものは露西亞國民だ、露西亞の曠野だ、露西亞の森林だ。それ等のものがなければ、僕等の著作は貧しいものだ。露西亞の農民と

話をする時、彼等の偽りのない健全な言葉、同胞に對する濁りのない人情は、僕に自分の心が如何に墮落したかを痛切に感じさせる。そして利己的觀念が自分の心の中に蟠つてゐるのを恥ぢない譯に行かない。』

『ネクラソフ君、君がそんな子供らしい空想に耽つてゐるのを君の口から聞かうとは實に意外だ。』

『これは空想ではない。君は社會に於てこの自覺を意識しないのか。』

『さういふ自覺はあつても、それは肉眼を以て見ることの出来ない原子のやうな微小な形に於てだらう。そんなものはこの社會では直ぐに消え失せるのだ。』

この話で見ても如何に彼が世界的名聲を望んでゐたか分るだらう。

彼はその頃ロシヤ文學を西歐諸國の讀書界に紹介しようと努めた。その目

的で彼は先づトルストイ伯の著作を佛蘭西語に自分で譯したり、またはその翻譯を指導したりした。それと同時に、外國の名著を露西亞語に翻譯したのも少くなかつた。この點に於ける彼の功績は決して尠くない。

十三

第三期の作物

千八百五十年の『餘計者の日記』から、千八百五十八年の『貴族の家』に至るまでを第三期の時代と呼ぼう。

この時期は、ツルゲーニエフの全盛期で、彼の才能は此期に於て頂點に達し、彼の名聲は旭日昇天の勢で中外に耀いた。この期の作は總て實社會に役立つたない、社會的事業に従事する才能のない、所謂餘計者を描いてゐる。即

ち空論には長じて居ても、社會の生存競争に堪えない劣敗者である。ツルゲ
ーニエフはこの劣敗者を寫すのに特別な技倆を有つてゐた。彼の作に現はれ
た人物は皆「餘計者」の分類であるが、たゞ一作は一作より其人物の性格が積
極的になつて、次第に現實界に近づいて來たといふ差があるばかりで、實質
に於ては依然として變らなかつた。此の「餘計者」は、千八百四十年及び五十
年代の露西亞の貴族社會の代表的人物である。當時の社會の風潮は斯ういふ
人物を生み出したのである。

『シチグロフ郡のハムレット』。此れは『獵夫記』の一篇であるが、他
の諸篇とは頗る性質を異にしてゐる故に、此篇だけは『獵夫記』から引離して、
獨立の作として研究すべきものである。シチグロフ郡のハムレットとは、ワシ

ーリイ・ワシイリエキチといふ男である。彼は智者で批評的眼光を有し、物
事を推斷するに妙を得てゐる。彼は母の手で養育せられた後、モスクワ大學
に入學し、更に獨逸に留學した。モスクワ大學では、常に學生俱樂部に出入
してゐた。彼は此會の事を痛罵して餘す所がない。俱樂部は獨立自存の精神
を滅亡せしめるものである、友誼の美名を被つた下司の寄合であると罵倒し
た。此社會では雄辯家を崇拜し、愚劣なる詩人の詩を盛んに讀んでゐた。かく
して彼は十分の學問を修め、高等の教育を受けた。然しその學問は彼にとつ
ては何の用をもなさなかつた。彼は學問を活用することが出来なかつた。彼
は外國留學から歸つて、幾度か實社會に出て事業に着手して見たが、何れも
失敗に終つた。彼は自分をハムレットの如き人物であると言つてゐた。

ツルゲーニエフの有名な『ドン・キホーテとハムレット論』の中に論じたハム

レットと此篇の主人公の性格とを比較すると、兩者の間には頗る類似の點を發見する。故に主人公が『我はハムレットなり』と自稱したのも偶然でない。此篇の主人公が教育せられた大學の學問も、學生俱樂部の討論も、其他彼が關係して來た事柄は皆抽象的性質を帯び、實社會とは何等の交渉をも有して居ない。それに彼の獨創的才能の缺乏が加はつて、彼をして愈々現實界と懸離れた餘計者即ち劣敗者と化して了つた。

『餘計者の日記』 此篇の主人公は、肺病を病んで死ぬる二十日許り前から日記を書き始め、その中で自分の經歷を語るチェルカツリンといふ青年である。此男は相當の教育もあり、性質も愚かな人ではないが、非常な懷疑家で且つ自惚心が強い。彼は何事を考へるにも、常に智力に訴へて、自己を分析

し、解剖する。而して自分は役に立つ人物ではないといふことを確かめて生きて居ても此社會に全く不必要な餘計者であると自分から極め込んでゐる。彼はライザといふ女に戀して、其戀に由つて幾分か安心し喜ばんとしたが、例の懷疑は如何しても彼に安心を與へない。ライザは初めの程は彼を愛してゐたが、後には彼を嫌つて、某侯爵士官に心を寄せる。チェルカツリンは嫉妬怨恨の情を起して、侯爵士官に決闘を申し込み、士官に傷を負はせる。士官は只空中に向つて發砲しただけであつた。決闘の爲めにチェルカツリンは全く精神的に死んで了つた。彼は侯爵がライザと手を切るに相違ない、そしてライザは元のやうに彼を愛する様になるであらうと空想した。彼は侯爵と決闘した爲に、却つてライザの心中に彼を嫌忌する情を吹き込んだといふ事を知らなかつた。侯爵は案の如くライザと手を切つたが、ライザはチェルカツリ

ンを嫌つて、他の男に愛情を寄せる。茲に於て、彼は全く煩悶懊惱の内に病死する。死去する前、彼は故郷の事を想ひ起して、故郷の天地に訣別する。春の麗らかな日和である。太陽の光が暖かに萬物を照して、自然界には勃々たる生氣が漲る時に、此若い青年が次第に衰へて行く哀れな光景を描寫した筆致は誠に艶麗なものである。

『ルーデン』 本篇の計畫は作者當時の生活より思ひ付いたものである。作者は其青年時代に三四十年代の理想家等と親しく交り、屢々是等の人々の性格や生活に就いて談論する機會を持つてゐた。で、其うちに作者をして斯かるタイプを藝術的に描寫して見ようとの企てを起さしめた。『ルーデン』は斯種の試みとして現れたものである。本篇は作者の過去生活の反映であると

ふ點よりしても、亦その藝術的價值よりしても成功の作である。此作には主人公ルーデンの性格が動作よりも言論の方に多く現れて居る。夫故に場面の變化には乏しい。其代り作中の人物といふ人物は殆んど間斷なく議論して居る。作者はルーデンに於て現實に居ない奇人を描かんとしたのではなく、當時青年の一般特徴を備へた典型的人物を描かうとしたのである。此の人物の特徴は作者ツルゲーニエフ自身の中に多くを有して居るばかりでなく、かのスタンケーウキチ會の會員中にも少からず見受ける。斯かる一般の心理的タイプは當時最も蔓延してゐたもので、作者は則ちそれを描いて露西亞の社會生活の一時機を如實に反映しようとして試みたのである。此點に於てルーデンは四十年代理想家等の典型である。このタイプの人々の第一の特徴は、凡て彼等の計畫が實際生活と遠く懸離れて、單に抽象的、理智的興味に止まつて居

ることである。彼等は常に詩や哲學に浸り、抽象的思索に浮び、高尚なる生活の理想を作り、それに就いて絶えず聲を大きくして語り合つてゐる。けれども此の理想は單に彼等相互の言語文書の上に止まり、何等彼等の實生活に及ぼす所がない。善と美に歡喜し、己が倫理的理想に熱中して居る是等の思想家等は、彼等の語る所と實生活との間に、或は彼等と周圍社會との間に、悲しい溝渠の存することを知らなかつた。總て是等の特徴はルーデンの性格に於て殊に著しく現はれてゐる。同時に彼の生活の歴史には作者自身の傳記をも含んでゐる。

ルーデンは幼い時から母の唯一の愛兒として、甘やかされ、チャホヤされるに慣れてゐた。母はその一粒種の我が子に有頂天になつてゐた。總て子供が強請るまでもなく、何一つとして叶はぬものはなかつた。自惚強い少年

は自分には他の子供よりも可愛がられる特別な徳を先天的に備へて居るかの如くに思つた。長じてモスクワ大學に入つて、他の多くの青年のやうに彼も亦大學生等の組織する學生俱樂部に入つて、ヘーゲルやシェリングの哲學に心酔した。此の俱樂部の中心にポルスキイといふ青年があつた。彼は他の青年に偉大なる感化を興へ、殊にその魅力ある容貌は、永く親友等の記憶に刻み付けられてゐた。ポルスキイの人物を見てゐると、讀者は不知不識の間にスタンケーウイチを想ひ起さざるを得ない。此の俱樂部で、ルーデンも亦中心的人物となつた。彼が生來の抽象的思索に對する能力と興味と反省的の傾向とは彼をして斯の如き哲學的方面に走らしたのである。彼の天賦の才能は、速かに哲理の根本を捉へ、それを的確に自己のものとして、直ちに相手に對つて雄辯と魅力ある言葉とで、整然と巧みに説明することが出來た。

このルーヂンの蔭にはスタンケーウキチ會員の一人バクーニンが隠れてゐることを想はしめる。實際作者も或る論文に於て、ルーヂンはバクーニンを描いたものであると表明したことがある。

彼は獨逸に留學して新智識を吸収した。けれども其性格は依然として變らなかつた。獨逸から歸國して、彼は所用があつてランスカヤといふ貴婦人の家を訪ねた。ランスカヤ夫人の家でも、彼は獨舞臺の花役者となつた。人々は彼が滔々として説き立てる辯舌に驚嘆し、終には隨喜者までも生じた。彼は突然感情に激する人で、自ら夢中の状態に陥り易い。が、それよりも己れの雄辯を以て人を無我夢中にならしめるのに最も妙を得て居る。その好適例を大學生バシストフ及び少女ナターシヤに於て見ることが出来る。バシストフは『始終口アングリと、眼を一杯見開いて坐つた。而て聞いた、丁度生れてか

ら一度も聞いたことのない者のやうに聞いて居た。』又ナターシヤの顔は『紅色を呈した、そして凝つとルーヂンに視入つた。彼女の眼は闇くなつたり、光つたりした。』ナターシヤはルーヂンの崇拜者となり、ルーヂンは彼女に向つて自己の理想を述べる。彼女の心中にはルーヂンに對する愛情が起る。質朴な、親切な、然し天性深慮にして決斷力に富むナターシヤは、ルーヂンを信じた。そして一身を彼に任せようと決心した。然しそのうちにルーヂンの行爲と言葉との間に、非常な懸隔のあることが暴露した。ナターシヤの母ランスカヤ夫人は、娘がルーヂンの妻になりたいといふ希望を抱いて居るのを知つて非常に怒る。母の不承知をナターシヤはルーヂンに話す。ナターシヤはルーヂンを性格の立派な強い意志の男と信じて居たのである。然るに彼女の相談に對して、ルーヂンは運命のまゝになるより外に仕方がないと答へる。

ルーヂンは、彼女に母と別れるのは辛いだらうとか、彼自身は貧乏者であるとかいふ事を言ひ聞かせる。彼はナターシャを心から愛して居るのではない。そして斷乎たる處置に出なければならぬ此場合に臨みながら、男らしい決斷を爲すことが出来なかつた。ナターシャは親をも棄て、彼の導く儘にならうと決心したのに反して、彼は臆病にも遁辭を使つた。彼は單に口先の人物である。彼は活動せねばならぬと言ふけれども、殆んど何事をも爲さない。然らばルーヂンは一生口舌の人として終つたが、小説の後半を讀むに至つて、吾人はルーヂンがたゞ口先の人間ではなかつたことが分る。彼は學校の教師となつて、根本的大改革を學校に斷行しようとしたが、何事をも爲し得なかつた。曾つて彼は露國のある河を凌つて舟運の便を圖らうとして、此大計畫に一身を委ね、其爲め數ヶ月間を汚ない小舎に起臥したこともあつた。其他

色々の事業に手を出したが、何れも失敗に歸した。彼が企業に失敗する原因は、實際生活に對する素養のないこと、事業家的才能の缺けてゐた事に基因する。又彼の企業を妨げたものは、周圍の社會であつたことは明らかな事實である。ルーヂンをして劣敗者たらしめたのは社會の罪である。ルーヂンが尋常一般の空論家でなかつたことは、彼が千八百四十八年佛蘭西革命の時、巴里の堡壘で戦死した事實に徴しても解る。

ルーヂンは熱中家である。然し頭だけが熱中家で、其心其血液は冷靜である。彼は自分の言ふ言葉に信念があり、理想を實現したいとの希望を抱いて居る。人を惹付け、人を激勵せしめ得る才能がある。彼の言葉と行爲とが一致しないのは彼の一大缺點であり、不幸である。此の言行不一致の不幸は、彼が露國の現實界に暗いからである。彼が抽象的理論や、形而上的推理に依

つて養成されて来た故である。又一部は彼の意志の薄弱なものにも因る。ルーヂンは徹頭徹尾時代の兒である。千八百四十年代に於ける露國貴族社會の代表者である。乃ち過渡期の人物である。彼の實質は「餘計者」と同類であるが、餘程活動的になつてゐる。これが批評家が、ルーヂンは積極的方面と消極的方面の二様の性格をそなへた人物であると論ずる所以である。作者も作の前半では彼を批判し、後半では彼の積極的活動に同情を寄せ、彼を憐んでゐる。

ナターシヤはツルゲーニエフの描いた女性の中では最も勝れたタイプである。ナターシヤは、眞面目で、智力があつて、沈思的な女である。彼女の特性ともいふべきは、沈鬱の氣質と、自分の決心を斷乎として實行するエネルギーである。ナターシヤはルーヂンの人物に心を惹かれた。後には深く彼を

愛し彼を信じた。けれどもルーヂンが無性格で、頼みにならないことを知ると、彼女は非常に失望し悲しんだ。かくして彼女の初戀は悲しむべき結果に終つた。それからは彼女の性格は闇黒となつた。其後ナターシヤはある男に嫁した。如何なる動機で嫁したか、それは分らぬ。然し必ずや初戀の不首尾な結果は、彼女の心理に大なる影響を與へたに相違ない。

『アーシヤ』 少女アーシヤはガギンといふ紳士が、自分に仕へてゐた小間使の女に關係して設けた私生兒である。アーシヤは父の家庭で、何の干渉壓迫も受けずに自由に生長した。そんな風であるから、アーシヤは日に月に生長して行く子供の獨立心と、鬱勃たる氣象とを壓潰すやうな狭苦しい教育法に束縛されるやうなことはなかつた。アーシヤは早くも家庭に於ける自

己の位置を悟つた。それと共に自分の心の欲する所を知つた。アーシャの心には虚榮心が生じた。即ち彼女は他の人以上になるとも、以下にはなるまいと決心する。そして自分が私生兒であることを人々に忘れさせようと努めた。アーシャには一人の男の兄弟がある。其兄弟は性質の善い青年で、少年時代からアーシャの無二の友達である。アーシャは生長して幾分か氣骨のある少女となつた。そして壯健なお轉婆な娘となつた。彼女は元氣旺盛で、見るもの聞くもの、總ての者が彼女の興味を惹き、彼女の心を娛しますのである。然しどれもこれも永續きはしなかつた。アーシャは何でも新奇な／＼印象を望んだ。そのうちに外國の旅行先で、ある紳士と知合になつた。何時の間にか彼女はその紳士を戀する。然しその嬌媚コケツトは何となく、無意識の様な状態で、何も當がなかつた。只彼女はその男の傍に居るのが嬉しいのである。

初めて戀してゐたのだと解つた時は、彼女は自分で驚いた。然し程なく心が落着いて、再び快活に心配氣なく話し出した。紳士に對するアーシャの愛は日に増し進んだ。アーシャは胸中の秘密を兄弟に打明ける。兄弟はよくアーシャの性情を呑み込んでゐる。で、彼はその紳士に向つて彼女の感情が如何に信じ難い強烈な力を以て現はれてゐるかといふこと、また彼女に斯かる感情の表れるのは實に意外で、最う何うにも斯うにもならないといふことを話す。するとその紳士にはアーシャを娶るといふ心が毫しもないことを兄弟は知つたので、彼はアーシャと離れて呉れと頼む。然しアーシャの愛情は益々高じるばかりで、遂にはその紳士と密會までも約束した。密會して見るとアーシャの思ひと紳士の心との間には大きい相違のあることが分つた。アーシャは紳士が愛情ある言葉を掛けて呉れるだらうと期待してゐたのに、事實は

全く反してゐた。そして紳士は彼女に手を切らなければならぬと言ふ。アーシャは兄弟と一緒に他國に向つて去つた。紳士は其密會が斯くも急速に且つ無結果に終りを告げたかと思ふと、あれは夢ではなかつたかと尙ほも疑つた。直ぐに紳士はアーシャの跡を追ふて出發したが、到頭行先を確かめることが出来なかつた。

此紳士はルーヂンと同じく決斷力のない無性格の人物であるから、熱烈なる眞の愛に接する場合に及んで、アーシャの面前で臆病になつて逃げたのである。此作は非常に餘情に富んだものである。巻を閉ぢてからもアーシャの縹渺たる俤は吾人の眼前にちらつくのである。

『貴族の家』

本篇は千八百五十八年に出版されて、文壇に於ける作者の

地位を鞏固にした名著である。一般公衆は勿論、批評家等も口を揃えて激賞して居る。實際此作は文壇に複雑な藝術上の問題を惹起す程、題材の取扱ひ方や描寫の手法が微細に且つ獨創的であつた。作者は描かんとする主人公の複雑な精神作用に向つて極めて端的に卒直に接觸し、其人物性格を躍動させて居る。リーザの如き優美な、純潔な、殆んど美の化身ともいふべき貴い女性はこの作者の筆を以てして始めて圓滿に傳へることが出来た。作中に現はるゝ人物の型は多種多様であるが、作者はその獨特な才筆を以て悉くの性格を巧みに描き分けてゐる。例へば稍々愚鈍と思はれる、然し極めて正直なお人好のマルフワ・ティモフェウナを描くに、特殊な民間の言葉を引用して、而も巧みに作全體の諧調を持續して居る。同じくバンシンを描くにも同じ筆法で完全に活躍させて居る。ラウレッキイの妻を描くには緻密な修飾的筆致を以

て、その感覺的美を遺憾なく寫し出すことが出来た。中にもリーザの容貌を描くあたりは優しい謹慎の態度をもつて近づきつゝ、彼女が如何にも優美に輝いて居るに拘らず故意に軽い涼しい風のやうな特徴を捉へて、極めてあつさりと言き流して居る。作者は初めから注意して彼女の全體を描き出すことをしない。唯個々の特徴をさつと言き流しておいた。而も其うちに彼女の純潔な心、内心の謹直、自分にも他人にも心持ち嚴格と思はれるほど、完全に整つた其の容姿をあり／＼と髣髴させて居る。ラウレッツキイの性格に至つては言ふまでもなく最も活躍して居る。

ラウレッツキイの生活には互ひに矛盾せる二つの感化があつた。一つは特殊の方法によつて子供を教育した父の感化、他の一つは讀書、交友、思索などの影響であつた。此二つの闘ひは、彼にとつては決して容易なものではな

つた。彼の父は西歐文明の崇拜者であつた。その青年時代に、農民や近隣の地主等の中にあつて、唯一人巴里仕立の燕尾服に、流行のステッキ、同じく流行に依つて、基督教を排して、その代りに十八世紀に於ける佛蘭西の哲學者の思想を取るといふ却々の高襟ハイカラーであつた。後に至つてはその生活を全然英國風に變へた。單に外形だけであつたが無暗と模倣した。子供の教育に就ても新しい思想に合ふやうに開發して行かうと考へた。夫故に彼自ら心服してゐる其難澁な且つ馬鹿げた規定を、頑迷な父の如く、子供も遵守せねばならなかつた。幼いラウレッツキイにルソエの思想を吹き込み、生活問題の配慮や歡樂を嫌惡せしめようとし、又は蘇格蘭風スコットランドの衣服を着せて、純スバルタ式の教育を施した。かゝる嚴格な中に教養せられ、少しも人生といふものを解せず、又世界の多くの人々が如何にして生きて居るかの考へすら有たないラウ

レツキイの生活は、父の死後に至つては全く扶けなく寄る邊ない者であつた。

父の感化と相應じて彼は母から残された先天的善心と、堅固な忍耐力と、正直とを有つてゐた。彼の母は卑しい農夫の娘であつたが、貴族の家に嫁して人生の辛酸を嘗め、稀に見る善良と忍耐と従順の生ける模範を示した婦人であつた。後に至つて、ラウレツキイは、この「農民の眞實」——不朽の善行と心の従順——を深く心に感じて、其前に跪拜すべきことを叫んでゐる。

父の感化は彼をして全く人生を解しない、その爲めに羞かみ易く、引込み思案で、平凡な小ぢンマリした生活をなさしめるに至つた。自惚強く用心深い彼は、己が愚かなる過去の生活の爲に苦しめられた。そして少年時代に害はれた痛手の疵痕を曝露することを恐れた。けれども彼が天賦の強固なる性格は、失はれたものをも次第に取り戻した。大分年をとつてゐたが、修養の

足らぬのを感じて大學に入つた。然し其處では餘り交際をせず、孤獨を守つてゐた。たゞミハレウイチといふ一人の友人があつたばかりである。ミハレウイチは三十年代の典型的人物ともいふべく、困苦と窮乏の辛い日を、理想生活に對する永久的計畫と、不斷の熱火とを以て飾つてゐる熱情家であつた。ミハレウイチはラウレツキイに、未來の妻を紹介した。が、其後間もなくラウレツキイの頭上に、その家庭生活を破壊する大打撃が落下した。爲に彼は更に天賦の強固な精神を奮つて、故郷に歸り、故郷の親しい人々の中に住つて平和な労働の生活に入らうと決心した。

彼はある見えない糸で、故山の人々と強く結び付けられてゐた。彼はその上に、平民生活が生む道德的宗教的基礎を深く感じてゐる。母から承け繼いだ純潔な天性は、彼をして一層農民と結び付けるに至らしめたのであらう。

父が努めて「歐化」せしめようとした結果は、既に早くから彼をして西歐の皮相的傾向に對して嫌惡の感を抱かshめてゐた。彼は「西歐主義者であるか、國粹主義者であるか」といふやうな無駄な疑問に思考を費さなかつた。けれど眞面目な且つ鋭い感じを有つてゐた彼は、平民生活の内部には、正直にして貴重なる深刻な意義の存することを感ぜない譯に行かなかつた。彼は「農民の眞實」を認め、その前に伏拜するの必要な事を斷えず口にしてゐた。彼は故郷の土地、田舎の村を指して歸つて來た時、此處こそ我が平和の生活を得る所、懐しい故郷の自然の中に入つたのであると感じた。不知不識の間に彼は精神の深い平和と慰安とを覺えてゐた。今や彼は己が心に最も親しい穩かな仕事を見出して、その中に全生命を打ち込まうと思つた。この土の上の勞働——土地の耕作、土地の開拓——これが彼の衷心からの望みであつた。か

うした目的を抱いて、彼は己が靜かな村に立籠つた。少しの騒ぎをも知らぬ靜寂、周圍の親しい人々、故郷の大自然は彼の心を満たすに充分であつた。けれども不圖したことから、リーザといふ少女を見初めてから、又しても彼は深い心のどよめきを覺えた。不知不識の間に全く少女の俘囚となつて了つた。數日の後、彼は老人レンムの音楽、その突然のインスピレーションに打たれて、感極まつて男泣きに泣いた。そして今の身の幸福を深く感じた。再び彼の生活は變化したが、此度は最早や永久に堅固なものであつた。そして彼は故山の土の勞働生活に身を委ねて、靜かに仕事に従事した。リーザの如く、またその百姓娘の母の如く、勞働を勵み、修道的生涯を送つた。此作の最後のページに至つて、彼の根本的思想が叫ばれてゐる——生活は個人の幸福をのみ目的とすべきものではない、ヨリ以上の重大な、高貴な倫理的理想

の追求、良心の命ずる所、進んで止むを知らぬ永久の使命の實行が存することを思はねばならぬ——この大なる使命に向つてリーザは進んだ。ラウレッキイも亦彼女との約束に従つて、これが實行に赴いた。

リーザの性格は、尙はその幼時に溯つて見ることが出来る。彼女の内面生活や人生觀は激しい變遷を経て形成せられたものではない。その幼い時から順序よく漸々と堅められ、發達した故に、總じて完全圓滿な性質を有つてゐた。その性格の力強く堅固な點は、正しく教養された結果で、自然に持つて生れた頑固ではなかつた。彼女は永久に己が道德的理想に對して犯し難い内心の義務を信じてゐた。従つてまたその生活は極めて正直なものであつた。その人生觀は専ら宗教的理想の感化に基いて形成せられた。幼い時から引籠り勝ちで、多く内面生活の中に生きてゐた。黙り勝な空想的な少女に對して、其

乳母アガフィヤの感化はまた大なるものであつた。アガフィヤは百姓女ではあつたが、一方ならぬ苦勞を経て來た、一通り世間の事も辨へた女であつた。彼女は種々な境遇の中に置かれたが、ある時は妾めかけのやうな生活をした。然し一度び決する所があつて、他人の肉慾の玩弄物たる生活から逃れて自由の境涯に入らうと企てた。そして彼女は沈思の人となり、黒い粗服を纏つて、斷えず祈禱を唱へ始めた。深い／＼考慮の後、彼女は遂に宗教に走り、その生活は全然修道的となつた。心の赴く儘各地の寺院を遍歴して救ひのために祈りを捧げることになつた。かうした經歷を有つた女が、リーザの乳母となつた。厳格な而かも柔和な宗教的道德的なこの乳母は、リーザの心に最も適合したものであつた。二人は共に聖者の傳を讀み、それらの人々の荒野に於ける嚴しい高い信仰に輝いた一生や、神に捧げた犠牲や、其の修道苦行の事跡に

就いて常に語り合つた。アガフィヤは毎朝こつそりと母に隠してリーザを起し、朝の祈りに會堂に伴つて、一緒に熱心な祈りをした。少女の心の中には、神と融け合つた、崇高と醇美とに充ちた清い宗教的理想が自づと成長した。幼い想像ではあつたが、彼女は神の聖い御姿を知つてゐた。『在らざる所なく、知らざる所なき神の御姿は彼女の靈の中に、甘い美しい力を以て押し入り、彼女を深く崇高なる畏怖を以て包んだ。基督も亦彼女の側近く來て、殆んど親しい友のやうであつた。』……宗教的理想は彼女の全生涯を照し、己れに對し人に對し、謙讓と純潔と嚴格とに勝れたものとなつた。リーザはその一步步々さへも良心の要求と一致し、倫理的理想と合致して、自己の生涯には何等の變化も移動もないものと思つてゐた。

アガフィヤは、旅に出てからは、打つて代つて輕調子なキザな女となつた。

けれどもリーザは、永久の眞實、崇高なる理想を抱いて、それに相應しい生活に赴かうと、以前にも増して沈思と獨居とを好んだ。アガフィヤの感化は神に献げた修道生活の如何に潔く穩かであるかを、彼女に屢々感じしめた。此世の人々の生活は、彼女には怖ろしくも愚かしくも思はれた。彼女の室がサツパリと嚴重に片附けられた有様は恰かも僧庵のやうであつた。彼女は母の許にあつて、ラウレッキイに會ふ迄は、全くかゝる潔い靜かな生涯を送つてゐた。彼女は母や、愛する老女マルファ・ティモフェウナの心持を察して、決して獨斷ひりりや片意地なことは少しもしなかつた。彼女は決して自分一個の幸福を望むやうなことはしなかつた。彼女にとつては人生こそ、神に於ける信仰と良心の聲との合致に依つて解決せねばならぬ大きな問題だと思つてゐた。彼女は凡ての人に一樣に接し一樣に愛した。そして『總ての人といふ人は

皆同じ神のもとに歩む。』のであるから、人生の問題に對しても、皆一樣に正しい解決が望ましいと願つてゐた。老音楽者レンムの憂鬱な孤獨な性質も、彼女を見る時は、生き返つたやうに、その心靈の奥底までも開いて彼女の潔く明らかな靈に交つて居る。また輕薄で利己的なパンシンさへも、彼女の懇懃な態度を慕ひ、その魅力に心を奪はれて居る。質朴で謹慎で正直な彼女は、人々を愛し、好んで農夫の家を訪問して談話を交へ、その中にある大きな喜びを感じてゐた。

リーザはラウレッツキイに會つて、その純潔で眞面目な性格を知つた。ラウレッツキイはパンシンのやうな虚飾のない赤裸々の人である。或は稍々陰鬱にさへ見える。けれど彼には美に對する深い感情と、若々しい潔白な精神とがあつた。リーザは彼の愛の純潔にして深いことを知つた。彼等二人の先天的

な多くの類似——故郷の人々に對する愛、生活に對する眞面目な態度、自然と美の前の歡喜——それ等は益々二人を接近せしめる基となつた。彼女はその生活に於けるが如く、眞面目な純潔な態度で、來らんとする幸福を迎へて居た。そして決して正義と良心とを犯すやうな事は毫もしなかつた。ラウレッツキイが、妻の不幸があつてからまだ日も浅いのに自分達の幸福を成就せしめようとするのを、彼女の良心は責めてゐる。而て妻の死去の報知に就て、ラウレッツキイの輕忽な態度を詰つてゐる。果してラウレッツキイの妻は生存してゐるのだと分つた時は、彼女はこれこそ利己的罪業に對する處罰であると思つて、此の最後の打撃を忍んで居る。リーザは更に現世を離れ、此世の心配から去つて、只管神に奉仕する修道的生活に入らうと決心した。けれど彼女のこの決心は、自己の幸福を破壊された恥辱と失望の極から出たものでは

なかつた。人生に對する自己の問題を最後まで解決し實現しようとする強い要求の意識から出たものであつた。かくして彼女には最早や此世の人々の間にあつて何の用もないものと思はれた。永劫現世の生活の興味とは縁遠いものと思はれた。そして一面には崇高なる詩と純潔と深遠なる宗教的理想とを望んで愈々修道院に入つた。

此作の中では、リーザの姿は輕妙に柔かな特徴を以て描かれてゐる。作者は初めから終まで彼女の全部を描寫しない。然し作者の筆のまばらな線の中に、少女の醇白にして詩的な容姿、その潔い精神と堅い決心を以て、宗教的理想に憧憬れ、遂に現世から逃れた古代聖者の如き其の面影は遺憾なく描き出されてゐる。

以上の外第三期に屬する作物には『三奇遇』、『ヤコフ・バスイニコフ』、『森林の旅』、『フワウスト』、『手紙』等がある。

(福音の報)

十四

農奴解放

ツルゲーニエフは外國に在つても、千八百五十七年から露國政府で着手した農奴解放の運動に注意を怠らなかつた。千八百五十七年の末から五十八年の冬まで、彼は羅馬へ行つてたが、丁度其處で露國政府が農奴解放の準備に着手したといふ報知に接したのである。

此時、羅馬には親友ポーツキン、チエルカスキイ侯爵、スミルノワ夫人等

の人々が居たので、ツルゲーニェフは此等の人と集會を開いて農奴問題に就て討議したり演説をしたりした。集つた人の多くはこの報知を聞いて喜んだ。ツルゲーニェフも無論喜びを感じたのであるが、彼は農奴解放に伴ふ一脈の暗流が社會に流れて居るのを認めない譯には行かなかつた。貴族地主の階級では農奴解放に賛成する者は極めて少數で大部分は自己の利益の爲に極力反對を續けてゐた。ツルゲーニェフは彼等の暗愚にして人道を辨へて居ないのを慨嘆した。『吾等は詐らず直言す、我が貴族社會の教育少き一事は、農奴解放の實施を妨ぐる大障害物である。』と彼は嘆いた。

そこで彼は直接社會的事業を起して、本國政府に聲援し、露國有史以來の一大偉業たる農奴解放を完成せしめんと決心した。千八百五十八年一月、彼は在羅馬の有志會の席上で、一通の意見書を發表した。その意見といふのは

本國政府が着々として準備に餘念のない事業に助力する爲に特種の機關雜誌を發行することであつた。それには農奴問題に關する政府の法令布告を網羅し、論說、通信、質問應答欄を設けて改革事業を研究評論することにした。雜誌の標題は『經濟指針』と名けた。この計畫は其處に集つた人々の賛同を得た。チエルカッスキイ侯爵は此計畫書を持つて、社會上有力なる人々に諮つて賛成を得ようとしてペテルブルグへ上つた。けれども此時代の人々の口癖として、其計畫も遂に時期尙早といふ事で成立しなかつた。ツルゲーニェフが羅馬を去ると共にその志望は消滅することになつた。それ以後は彼は單に藝術家として、此偉業の結果影響を描寫したばかりで、直接に農奴に關係したのは自己の所有地の範圍内だけであつた。

千八百五十八年三月伊太利を出發して、暫らく巴里と維納に滞在して六月